

～くぬぎの森～

第 23 号

2012年2月1日

熊本高等専門学校熊本キャンパス
図 書 館



(菜の花)

目 次

〈随 想〉

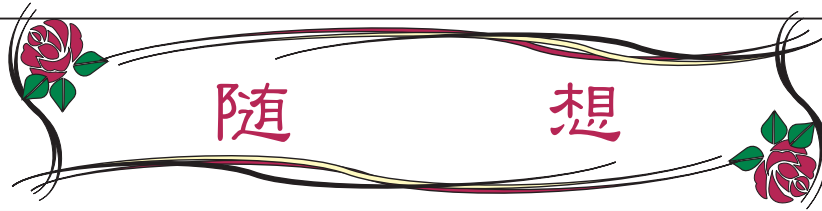
ブックハンティング	図書館長	三 好 正 純	2
江戸の国際関係への読書案内	人間情報システム工学科	村 上 純	3
図書館勤務を通して	情報通信工学科4年	高 山 なつ樹	8
図書館のアルバイトで得たこと	情報通信工学科4年	杉 町 悠 太	8
図書館業務を経験して	情報通信工学科4年	鈴 木 瑠 衣	9
学生図書職員を経験して	情報通信工学科4年	原 田 いずみ	9
図書館の勤務の感想	電子制御工学科4年	原 田 健太郎	10
図書館のアルバイトをして良かったこと	情報工学科4年	水 間 海 帆	10

〈平成23年度第33回校内読書感想文コンクール 選考結果及び作品紹介〉11

〈第57回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査入賞者及び第31回全国高校生読書体験記コンクール入賞者〉31

〈図書館からのお知らせ〉

図書館利用案内・お知らせ	32
図書館利用状況報告・蔵書数及び視聴覚資料関係	33
編集後記	図書館運営委員 大石 信 弘 34



ブックハンティング

図書館長

三好正純

本図書館では年2回、ブックハンティングを実施しています。毎回、十数名の学生が参加し、書店で1時間ほど店内を散策しながら本を収集します。

当館の新着図書は、定期購読雑誌のほか、教職員の研究・推薦図書と学生の希望図書に大きく分けられます。教職員の研究図書や推薦図書は教職員の視点で選定され、専門書や教科参考書が中心となります。一方、学生の希望図書は学生が自ら購入を希望するものであり、学生の視点で選定されます。教科参考書のほか、趣味や活動に応じて文芸や実用書など多岐に渡り、図書館にとっても、若者の感性にあった本が増え蔵書の幅が広がるなどの利点があります。希望図書は図書館で申し込む方法とブックハンティングによる方法があります。ブックハンティングは実際に本を手にとって選定できるのが魅力です。今年度も6月と12月に、熊本市の蔦屋書店（三年坂店）で実施しました。以下では、今年度のブックハンティングについて紹介します。なお、書籍のジャンルは通販アマゾンを参考に分類しました。

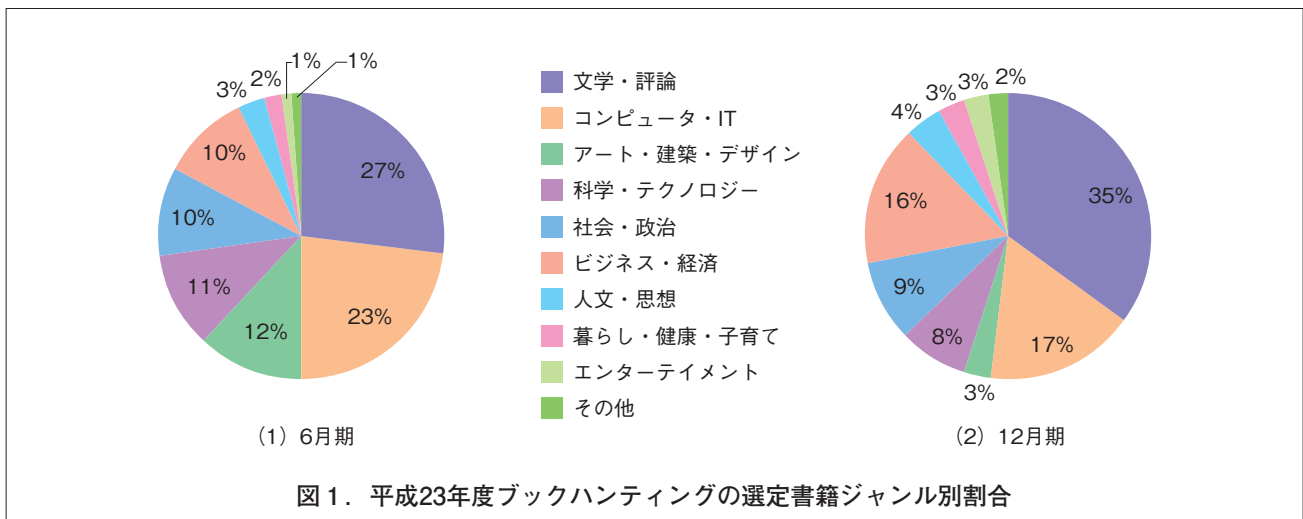
(1) 6月期（平成23年6月16日（木））

参加学生14名（本科2年：2名、3年：7名、4年：2名、5年：1名、専攻科1年：1名、2年：1名）。選定書籍数は156冊、ジャンル別には次のとおりです。文学・評論（42冊）、コンピュータ・IT（36冊）、アート・建築・デザイン（19冊）、科学・テクノロジー（17冊）、社会・政治（16冊）、ビジネス・経済（15冊）、人文・思想（4冊）、暮らし・健康・子育て（3冊）、エンターテインメント（2冊）、旅行ガイド（2冊）。

(2) 12月期（平成23年12月10（土））

参加学生12名（本科3年：3名、4年：5名、5年：4名）。選定書籍数は161冊、ジャンル別には次のとおりです。文学・評論（57冊）、コンピュータ・IT（28冊）、ビジネス・経済（26冊）、社会・政治（14冊）、科学・テクノロジー（13冊）、人文・思想（6冊）、暮らし・健康・子育て（5冊）、アート・建築・デザイン（4冊）、エンターテインメント（4冊）、歴史・地理（4冊）。

以上2期のジャンル別割合を図1に示します。なお、変化が分かりやすいように12月期は6月期と同じ順序で並べています。概ね、2期とも文学・評論およびコンピュータ・IT関係で半分を占めています。6月の特徴としてコンピュータ・IT関係とアート・建築・デザイン関係の割合が多く、12月期の特



徴としては文学・評論関係とビジネス・経済関係の割合が多くなっています。コンピュータ・ITではプログラミング手法に関するものが多くあり、デザインではCGやデザイン素材など実用的な書籍が多くありました。6月期の参加学生は学年層が幅広く、専攻科生も参加していることから研究関連で選定されたことも要因の一つと考えられます。一方、ビジネス・経済関係には自己啓発本が多くありましたが、6月期は主に経営・人生論・生き方に関する書籍、12月期は加えて、仕事術・ビジネス交渉など社会活動の実用書籍が含まれていました。5年生が就職を目前にした時期であったことも一因でしょう。そのほかに特徴的なこととして、社会・政治関係のなかで6月期には公務員試験参考書が多くありました。これも時期的なものと考えられます。最後に、文学・評論関係では、日本文学・欧米文学など一般の文芸作品のほかミステリー・サスペンス・ハードボイルドといった分野も多く、若者の感覚で選定されています。

今年度も2回のブックハンティングで300冊余りの新着図書を加えることができました。参加してくれた学生諸君に感謝します。図書館では新着図書は入館者の目に触れやすいところに配架しており、貸出図書としても人気があります。今後も魅力ある図書館づくりとして実施する予定です。多くの学生諸君の参加を期待しています。



江戸の国際関係への読書案内

人間情報システム工学科

村上 純

I

江戸時代わが国は鎖国をしていたという常識は、近年は変わって、四つの口を通して周辺の地域、さらにその外の世界とつながりながら発展を維持してきたと認められている。四つの口とは、荒野泰典氏が名付けた、松前、対馬、長崎、薩摩のことで、それぞれ蝦夷地、朝鮮、中国船・オランダ船、琉球と交易が行なわれた（荒野泰典、「世界のなかの近世日本—日本に『鎖国』はあったのかという問いについて」、『歴史読本』2011年10月号・特集「世界のなかの江戸 JAPAN」所収）。

この鎖国という言葉は志筑忠雄というオランダ通詞が19世紀になって初めて使用した。『日本人の西洋発見』（ドナルド・キーン、中公文庫）によると、志筑が翻訳したケンペルの『日本誌』の一部は、原著では「日本帝国が目下行なっているように、国を鎖ざし、国内国外を問わず住民の外国通商を許さぬ態度は同帝国の利益に貢献するか否かについての考究」と題されており、志筑はこれを『鎖国論』として訳出したのである。キーン氏は、志筑の翻訳の目的は、「一人の著名なヨーロッパ人が鎖国政策の継続を日本にとってもっとも賢明な方針と考えていることを人びとに示す点」にあり、「これはおそらく、日本の伝統的な生活方式が最良のものであることを証明するのに西洋の書物が引かれた唯一の例であろう」と書いている。そして、「志筑のような優れた洋学者が、同時にまた熱心な鎖国論者であったことは一見奇異に見えるが、しかしかならずしも矛盾していたわけではない。（中略）日本が西洋からなにを借り入れるかについて、日本人は自由な選択の能力を保持していなければならないというのである。開国すれば有益な科学知識がもたらされるだろうが、またそれとともに好ましからぬ外国思想が入りこむのも避けがたくなる、という考えであった」と分析する。

II

オランダ通詞とは、『<通訳>たちの幕末維新』（木村直樹、吉川弘文館）に、「江戸時代を通じて、

オランダ語の通訳と翻訳を幕府直轄都市長崎という場所で担うことを生業としてきた職能集団」とあり、18世紀になると「日本社会は、『蘭学』と称される西洋科学に対して目を向け始めるようになり、通詞たちの技能は利用され、社会として必要とされるに到ったといえる。」18世紀末から19世紀初頭には、日本の科学史上に欠かすことのできない洋学者として、志筑のような通詞たちが出てくるのである。木村氏の本は、オランダ通詞たちが、時代の変遷により必要となってきた英仏語にいかに対応し、幕府や明治政府が彼らをどのように登用したか、彼らの処世術や渡世はどのようであったかなど、分かりやすく述べている。

幕末のペリー来航と日米和親条約締結は、オランダ通詞たちの任務の転換点となった。開港・開国は彼らの活動の領域と質を変化させ、文字通り東奔西走することになる。ペリーが浦賀に姿を現したとき、最初に交渉に当たった通詞は堀達之助で、彼が「はなはだ見事な英語で『私はオランダ語を話すことができる (I can speak Dutch).』』といったことは有名なシーンである。」江戸や浦賀には、英語やフランス語で対応できる通詞が集められたが、やはり、彼等にとって最も得意な外国語はオランダ語であった。このとき、堀ら2名では不十分と考えた幕府は、長崎からさらに森山多吉郎(栄之助)ら2名を呼び出したものの、彼らが江戸に着いたときには、既にペリーは立ち去った後だった。

オランダ通詞たちはどうやって英語を学習したのだろうか。やはり後に幕臣となったオランダ通詞の西吉十郎が、長崎から江戸へ移るに際して持って行った書物のリストを見ると、英語について解説したオランダ語の書籍が多いことから、オランダ語をベースにして英語を学んだことが分かる。

開国後には、通訳・翻訳が不足したので、養成する必要が生じ、函館や神奈川に学習機関が設けられた。直接外国人に習う機会も増えた。ペリー来航以前にも、早くから英語の重要性に気づいていた長崎では、ネイティブスピーカーから直接英語を学ぶ機会があった。スコットランド人の父とアメリカ原住民の母を持つラナルド・マクドナルドが、捕鯨船から自ら希望して蝦夷地に上陸したのである。マクドナルドは長崎に送られ、軟禁状態で半年間滞在したが、その間、森山ら14名のオランダ通詞が彼のもと

を訪れ、熱心に学んだ。マクドナルドは、通詞たちがLとRの発音の区別ができないことや、曖昧母音の発音ができないことを記しており、現在の私たちと変わらない。

「日本最初の英語教師」マクドナルドが日本に来ようとした動機や、そのための計画などは、『マクドナルド「日本回想記」』(ウィリアム・ルイス、村上直次郎編、富田虎男訳訂、刀水書房)に詳しく、訳訂者は、彼のカナダ社会からの出奔の動機として、『『自由』への欲求と、『社会的な諸要因』』に注目している。

マクドナルドは、長崎での尋問の通訳となった森山の印象を、「この若者について、とくに少し言及しておく必要がある。彼は、私が日本で会った人のなかで群を抜いて知能の高い人だった。彼は青白い考え深げな顔つきで、人を射るような黒い眼をしていた。その眼は、魂のなかまで探り出し、あらゆる感情の動きを読みとるように思われた。彼の英語は非常に流暢で、文法にかなってさえいた。発音の仕方は独特だったが、日本語とは異質な文字と綴りの組み合わせを、おどろくほど見事に駆使していた」と書き、彼にとって森山は、日々の伴侶ともいえる存在となった。

生徒たちは真面目に取り組み、彼らのもの分かりのよさや学識の広さに驚いたマクドナルドは、「彼らは私の知るかぎり、生来もっとも賢い国民で、「彼らが必要としているのは、外からの光だけである。それこそが、今日、西洋的生活の英知をしだいに吸収し積み上げながら、急速に興起しつつある東洋の秘密にほかならない」と書いている。

通詞らの評価について、森山を取り上げた『幕末の外交官 森山栄之助』(弦書房)の著者江越弘人氏は、同書でこう書いている。「日米和親条約や日米修好通商条約が不平等条約であるということで、当時、条約締結にかかわった幕臣たちの評判は非常に悪く、それが彼等を歴史の舞台から消えさせている理由となっている。(中略)それらは、彼等だけに罪を着せられるものではない。むしろ、国内外の強い風当たりの中でここまで漕ぎつけた、日本の独立を保つことができたという功の方が大きいのではないかと思う。」

森山はオランダ通詞から幕臣となり、駐日イギリス公使オールコックと同道して、ロンドンで竹内遣欧使節団に合流した。この使節団には福沢諭吉が加わっていることはよく知られているが、ほかにも通詞として福地源一郎らが渡欧した。江越氏によると、福地は森山の長崎の後輩で、英語を学ぶために森山の門を叩いた。福沢諭吉も同門である。ただし、森山は忙しくて、教える暇もなかったらしい。

兵庫開港後は兵庫奉行組頭を務めた森山であるが、新政府の官吏にはならず、その動静はよく分かっていない。「明治になって早くも人々から忘れられてしまった。」それは、幕臣となった後にジャーナリストとなり、東京日日新聞の社長にまでなった福地にしても同様で、死後は早くも忘れられた。

Ⅲ

「黒船来航と日本開国について、日本には今なお次のような理解が広く存在している。無能な幕府が、強大なアメリカの軍事的圧力に屈し、極端な不平等条約を結んだという説である。(中略) この見方は明治十年代以降、とくに条約改正を本格的な政治課題に掲げてから強化された。明治政府は条約を改正する根拠として、条約そのものがいかに不平等かを強調し、条約を結んだ前政権の幕府を無能無策であったとする政治的キャンペーンを張った」と書くのは、加藤祐三氏の『幕末外交と開国』（ちくま新書）である。それが、いかに歴史の実像とかけ離れているかは、日本側全権の林大学頭とペリーとのやり取りを読めばすぐに納得がいく。「日本外交史のなかでは、幕府の高い外交能力が特筆されるべきであろう。老中・阿部正弘をはじめ、交渉にあたった林大学頭ほか奉行・与力・同心にいたるまで、交渉相手のペリー一行にたいして格別の偏見も劣等感も抱かず、熟慮し積極的に行動した。外交に不可欠な情報の収集・分析・運用の三拍子を組織的に駆使し、条約に多くの対等性を持たせることができた。」この本には、ペリー側の、交渉する言語の選択、通訳として選んだサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズとの任用の交渉などの裏事情も詳述されていて、とても興味深い。ウィリアムズはアメリカの宣教師で1933年以来中国に滞在していた。日本でも、ペリー来航後はヘボンらの宣教師が語学を教えている。

『国難を背負って一幕末宰相 阿部正弘・堀田正

睦・伊井直弼の軌跡』（脇坂昌宏、論創社）は、一級の政治家についての、「一利を興さんよりは一弊を除く」という格言に則り、人心に戻らず世論を驚かさずして、漸次に成功の功夫（工夫）をなすことこそ政治家の秘訣なるべけれ」という福地源一郎の言葉を紹介している。この本は、タイトルになった3人の宰相が国難にどう対処したかを描いている。阿部については、「富国強兵・海防という大局のために、破るべき法は確実に破ったが、それとは逆に古法に則さねばことが円滑に進まないと見れば、そこに『浪費』があると知っても、黙許した」とある。通詞たちの活躍もさることながら、宰相たちも国難に際し、懸命に努めた。

インテリジェンスという言葉について、岩下哲典氏は『日本のインテリジェンス—江戸から近・現代へ』で、「国家等の組織運営にかかわる情報活動—情報の収集・分析・活用」と定義している。この本は、例えば、出島のオランダ商人にオランダ風説書を提出させるなど、幕府にはインテリジェンスが存在したとして、インテリジェンスの面から近・現代を分析したもので、大変面白い。

日米和親条約締結のために再来日したペリーとの交渉に、森山は主席通詞として当たった。ペリー側の通訳ウィリアムズは「条約の処理はすべて栄之助の手に委譲されているのかと想像された。栄之助はこの協議に決定権を任されているように見え、そしてそれ相当にその任に適してもいた」と書いている。森山が林大学頭をものぐさ力を持っていたのは、森山の英語力や交渉能力のほかに、当時の日本社会の在り方が背景にあると岩下氏は書く。そして、近世日本社会では、基本的に現場にかなりの裁量が任され、ある程度、非常事態にも臨機応変に対応できたとする。



風説書とは、『オランダ風説書—「鎖国」日本に語られた「世界」』（松方冬子、中公新書）によると、出島にオランダ船が入港すると、商館長から「戦争や講和、戦闘や勝利、王の即位や死など」の情報を通詞が聞き取り、書き留め、幕府に提出した書類である。内容には、「ヨーロッパ、西アジア、現在のインド、東南アジアなどだけでなく、アフリカ大陸や南北アメリカ大陸に関する話も含まれていた。」18世紀の半ばになると、日本への情報提供でオランダと競合する国はなくなり、「オランダ人の言うことを日本人は何でも信じると商館長が感じるほどだった」。幕府もオランダも、「カトリックの勢力がふたたび日本に及ぶかもしれないという恐怖から自由に」なり、「『西洋近代』の新しい動きは、日本人の間ではいまだ脅威だとは認識されていなかった。」

しかし、ロシア使節レザーノフの来航やフェートン号事件など、ロシア船やイギリス船からの情報により、西洋近代の波に接触すると、幕府は西洋近代の影を恐れの対象とを感じるようになっていった。「それは、当時の日本人が何となく感じ取っていた新しい動き」でもあった。著者は、「私が知るかぎり、世界中の情報を200年以上にわたり定期的に報じ続けたメディアは風説書だけ」であり、「江戸時代の日本は完全に孤立していたわけではなく、世界史の文脈の中に確実に位置づいていた」と書いている。また、「この時代同じ東アジアで、清朝も李氏朝鮮も、対外関係はかなり限定的であった」とも。松方氏は四つの口について、どちらかという中国とつながるための装置であり、鎖国政策はヨーロッパ勢力から身を守るためのものだという認識である。

この本には、オランダ側から見た日本について詳述されているが、オランダ人が世界に日本を紹介する『十七世紀のオランダ人が見た日本』（クレインス・フレデリック、臨川書店）や『ケンペルとシーボルト—『鎖国』日本を語った異国人たち』（松井洋子、世界史リブレット、山川出版社）も勉強になった。清と朝鮮における西洋受容については、日本の場合と比較することにより、日本のそれについての理解が深まる。『イエズス会と中国知識人』（岡本さえ、世界史リブレット、山川出版社）は分かりやすく、『西洋と朝鮮—異文化の出会いと格闘の歴史』（姜在彦、朝日選書）は索引も含めとても充実した本であった。上海で私も訪れたことのある徐家

匯の由来となった徐光啓について書かれた『上海時空往来』（莊魯迅、第8章「徐家匯物語—西洋文明との邂逅」、平凡社）も挙げておきたい。『上海アラカルト』（追手門大学アジア学科編、和泉書院）の第1部にも「徐家匯天主教堂—上海の芥川と泰淳」（永吉雅夫）があるが、この本は第2部「アヘン戦争資料 嶺田楓江『海外新話』」に価値がある。余談まで。

IV

18世紀末に活躍した通詞として、吉雄幸作も有名である。特に、司馬江漢の旅行記によって、オランダ風の邸宅や生活がよく知られている。『阿蘭陀が通る一人間交流の江戸美術』（タイモン・スクリーチ著、村山和裕訳、東京大学出版会）には、「18世紀後半にヨーロッパ事情に最も詳しく人物といえれば吉雄幸作であろう」とある。来日したオランダ商館長や外科医から、蘭医を身に付け、長崎で蘭医塾も経営していた。

彼の家の2階にあったオランダ座敷の絵が残されている。西洋風のテーブルに掛けた4人の侍たちが、西洋の食器で飲食している。当時の家屋はほとんどが平屋であり、2階に部屋があるのは珍しい。スクリーチ氏は、「部屋からは美しい長崎の港が一望できる。一般的に、家の窓から眺望を楽しむという考えは江戸時代の日本にはなかった。もちろん部屋から庭を眺めるという習慣はあったし、庭が広い外の世界を写した『借景』という概念に基づいて造られることも少なくはなかった。しかし、見られることへの否定的意識は非常に高く、複雑に発達した日本的なプライバシーの概念と相まって、概して日本では部屋に大きな眺めを設けることに消極的であった。（中略）家から眺めるといのは異国的なことであり、二階で応接するというのはヨーロッパ的な生活感覚だと思われていた」と述べている。しかし、吉雄は寛政の改革時、誤訳事件により失脚してしまう。

スクリーチ氏のオランダ座敷についての考察は、岩下氏のインテリジェンスの次の記述と共通するところがあるように思われる。「鎖国を維持していくには、日本に外交関係の樹立や通商を要求する国々の動向を知ることが必要不可欠だった。自分の情報は極力隠しながら、海外の情報は出来る限り入手する。もちろん、下々には海外情報を伝えないし、伝える必要も感じない。それが幕府のスタンスだっ

た。」

『平成蘭学事始—江戸・長崎の日蘭交流史話』（片桐一男、智書房）には、吉雄のオランダ座敷で催された、オランダ正月（太陽暦の一月一日の祝宴）の料理を平成6年に再現したイベントの詳細が載っている。オランダの料理や飲み物に最も通じていたのも、オランダ通詞たちだった。

司馬江漢も興味の尽きない人物である。キーン氏は前掲書で、江漢を「18世紀末葉の洋風画を代表するもっとも重要な人物」とする。日本画や漢画を学んだ江漢が西洋画に興味を持ち、その習得に傾倒していった動機は次のようなものだった。「かれの富士山を愛する気持と、この名山をあらゆる角度から描いてみたいという願いであった。これまで、漢画家たちは富士のような日本的な山とは無縁なのがつねだった。かれらは古い名匠たちの作品や手本のなかの名もない中国の山々を写して、画幅をうめていたにすぎないのである。また伝統的な日本画の一派も富士山の『精神を写す』といった茫漠とした主張を繰り返すのみで、その見えるがままの姿は写すことなどとてもできなかった。」江漢自身、その美術観を以下のように語っている。「画の妙は、いま眼前にない物を直ちに眼に見えるようにするところにある。物を真に写していなければ、画をして画たらしめるあの妙力に欠けることになる。富士山は他国にない山である。他国にあってこれをみようとする人は、画を通して以外に見ることができない。だが、その画がただ中国風の筆意筆法にのみ従ってはい、富士山に似なくなり、画本来のあの妙力がなくなってしまう。富士を写真する方法は、ただ蘭画のみで

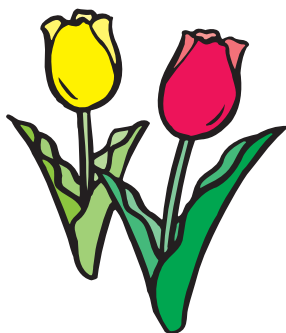
ある。」そして、江漢は洋画をもっと深く学ぶために長崎へと旅立った。「今日の日本の洋画を人がどう考えるにしても、それが実用性と真実性を求めた江漢の情熱と実験から生まれでて、受けつがれてきたものであることは明らかであろう」とキーン氏は書く。

しかし、江漢は西洋の教えには精神的に満たされないものを感じ、「蘭学がかれの知性面を満足させてくれたように、かれの霊的側面を満たしてくれる宗教や哲学をむなしく求めつづけ、その果てに一種の人間嫌いに陥って」、「最後に、老子のいわゆる『名づけ得ぬ道』に慰めを見いだすにいたった」のである。

V

本小文は、最近の私の興味ある日本と西洋の関係についての読書をまとめたものである。木村直樹氏の『<通訳>たちの幕末維新』は、先週末に出たばかりの本で、これを読んでから書き始めたかったため、短時日で書き上げないといけなくなり、あまりや深みのない文章で恐縮する。

ペリーと競って来日したプチャーチンなど、ロシアと日本の関係も深く、『プチャーチン—日本人が一番好きなロシア人』（白石仁晃、新人物ブックス）、『ドラマチック・ロシア in Japan—文化と史跡の探訪』（長塚英雄編、生活ジャーナル）の第4章「江戸・明治・大正時代の日露交流から」も興味深く読んだ。森山ら通詞たちは、ペリーに、プチャーチンに、ハリスにと、その対応に駆り出された。ロシアからの訪問者では、時代は下るが、ベニョヴスキーが面白い。詳しくはキーン氏の『日本人の西洋発見』で。



図書館勤務を通して

情報通信工学科4年 高山 なつ樹

このカウンターで、一年間本当にたくさんの人と話をし、また関わる事ができたと思う。友人も頻繁に来館してくれた。いっしょに雑誌を読んだり、テスト前は勉強を教えあったりした。これは一応仕事ではあるが、仕事をしているという感覚ではなく、逆に勉強やレポート、読書など貴重な自分の時間として有意義に活用することができた。このカウンター業務のいいところはそういうところで、わたしが一番ステキだなと思ったのはやはりたくさんの人と関わりを持てるということだ。

以上が一年間の大まかな感想であるが、ここでわたしの場合の一年間を振り返ってみようと思う。まず常に駆け込みで17時ギリギリか5分遅刻で図書館に到着。そして図書館のマスコットキャラクターである緒方さんと地元のからあげ屋さんの話で盛り上がったたり、他にもたくさん面白い話を聞きながらカウンター業務をこなす。友達が来れば一緒に今月のタンクマを読んで、テストが終わったらあの店の食べ放題に行こう、あそこのパフェを食べにいこうとワクワクしながら計画を立てる。後輩がお悩み相談にきてくれることもあるし、一緒に資格の勉強をしたりもした。もちろん本を借りにくる人もいる。「貸してください」と来た人ともまた別の話で盛り上がり、しまいには本を磁気のマシーンに通し忘れ、センサーのうるさい音を鳴らしてびっくりさせてしまったことが何回もある。

めまぐるしい一年間だった。この図書館のカウンター業務を経験させていただき、貴重な一年間を過ごすことができ本当によかったと思う。

図書館のアルバイトで 得たこと

情報通信工学科4年 杉町 悠太

私が図書館勤務をしようとしたきっかけは、部活の先輩からの勧めにありました。そして、実際に図書館勤務をしてみて、図書館について何も知らなかったことを実感させられました。

まず1つ目に、図書館は土曜日も開いているということです。私は、テスト前かテスト中の土曜日の当番が多かったのですが、このような日は人が多く、また一般の方も利用されていました。

2つ目は、カウンターで資料検索ができることです。カウンターから資料検索ができるので、探したい本がすぐ見つかり非常に便利でした。3年生の時にこの機能について知っていれば、もっと効率的にレポートが書けたのではないかと考えています。

3つ目に、専門書だけではなく英語の本や流行の本まで置いてあるということです。参考書が多いイメージを持っていたので驚きました。3年生の時にブックハンティングに参加して、流行の本が取り入れられることがあると知っていましたが、この図書館勤務で流行の本はブックハンティングの時以外にも取り入れられることがあることを知りました。

そして、私が図書館勤務をするまでの3年間は、図書館を有益に使えていなかったと思います。だからこそ来年は図書館を使い倒し、また、できるだけ多くの人に私の知らなかった3つのことを伝えていきたいと思っています。

最後になりましたが、この1年間いろいろと親切にしてもらいありがとうございました。



図書館業務を経験して

情報通信工学科4年 鈴木 瑠衣

2011年の4月から図書館業務の補助をさせていただき、そこで様々なことを学びました。

その1つは多くの種類の本があるということです。私は図書館を利用するときは小説か、課題のための参考書くらいしか本を借りたことがありませんでした。しかし、本の検索を頼まれたときなど、この棚にはこんな本があるんだと気づくことが何度ありました。宗教や料理、絵画など授業で扱う以外の分野の本もいろいろあり、読んでみると面白いものもいくつもありました。今後もいろんな分野の本を読んでみたいと思います。

次に、図書館の利用目的はいろいろあるということです。図書館で本を借りるのはもちろんですが、テスト期間でなくても放課後に勉強をしに来る人、コピー機やホットキスを使用しに来る人など様々でした。利用目的は色々ありますが、せっかくならついでに本を見てみたりしてみてください。意外な発見が見つかるかもしれません。

今年度は図書館の改修工事のため、後期からくぬぎ会館に移動して部屋が小さくなり、本の数も少なくなっていました。勉強スペースに新しい椅子や電気スタンドが設置されたりと、利用しやすい環境だったんじゃないかと思います。

図書館業務の補助を行って、色んな人と話す機会や色んな本に出会うきっかけがありました。このような経験ができて本当によかったです。来年も新しくなった図書館をどんどん利用していこうと思います。

お世話になった皆様、ありがとうございました。

学生図書職員を経験して

情報通信工学科4年 原田 いずみ

私が学生図書職員を経験して得たことは、2つあります。

1つ目は、たくさん本と出会えたことです。みなさんご存じのように、図書室にはたくさん本があります。学生図書職員として図書室に行く機会が増え、以前よりも多くの本を読みました。学生から依頼を受け、図書室内にある本の検索をすることがありますが、その際に自分の知らない本の存在の多さに驚きました。

また、図書室には年に数回開催されるブックハンティングや、学生からの希望の声などで、新しい本が入ってきています。学生図書職員になれば、新しい本の入荷情報をいち早く入手することもできます。

2つ目は、放課後の時間を有意義に使えたことです。学生図書職員は、平日の17:00から20:00(冬期は19:00まで)までの時間と、土曜日の10:00から16:00までの時間で、本の貸出・返却などの業務を行います。業務は当番制で、負担になることはありません。業務中は業務に支障が出ない程度であれば、自由に過ごすことができます。本を読んだり、テスト期間中であれば、試験勉強もできます。

以上のように、学生図書職員には様々なメリットがあります。

- ・本が好き
- ・放課後の時間を有効活用したい
- ・図書職員の業務に興味がある 等

どんな理由でもかまいませんので、3年生で来年度の学生図書職員の募集に応募するか迷っている人は、ぜひ応募してみてください。

私の意見が応募の後押しとなれば、うれしく思います。

図書館の勤務の感想

電子制御工学科4年 原田 健太郎

テスト期間になると図書室に勉強しに来る学生が多くなります。高専の図書室は専門書に関しては非常に充実しています。県立の図書館に行ってもここまで専門書はそろっていません。なぜなら図書室では定期的にブックハンティングを行っています。学生が必要としている本を常に取り入れているためレポートで悩んだらとりあえず図書室に来ればたいの問題は解決します。同様にテスト勉強の過程でわからないことがあったとしても大概のことは図書室で解決できます。あまり図書室を利用したことがない学生はぜひ利用してほしいです。

図書の仕事をしていると、様々な人が本を借りに来るのでどんな人がどのような本が好きなのかがわかってきます。そこで自分と趣味が合いそうな人がいればその人と軽く会話を交わすのも面白いものです。一人で本を読んで終わるのではなく、他人がどのようにこの本を解釈したか、自分とはどこが違うのかなど新しい発見があります。本が好きな方はぜひ、この仕事をやってもらいたいです。

もちろん本に今は興味がない学生もいずれは就職活動を行う上で自分をアピールする必要があります。そのときに「日本語力」がなければうまく自分を表現することができません。本を読めば語彙力がつくし、複雑な日本語の表現も学ぶことができます。将来に向けて今からでも本を読もうと思っている方には図書の仕事をすすめます。常に本に囲まれているので、少しは本に対する興味が出るかもしれません。



図書館のアルバイトをして良かったこと

情報工学科4年 水間 海帆

私は、4月から当校の図書室でアルバイトをさせていただいた。主に、本の貸し出しや返却の手続きをしたり、来館者が本を探すのをお手伝いしたりという業務内容であったが、私はこのアルバイトをして本当に良かったと感じている。具体的に何が良かったのかと言うと、まず、読む本の幅が広がった。私はもともとあまり図書室に通う方ではなく、読む本も小説だけに限られていた。しかし、図書室のアルバイトをするようになり、業務をこなすことにより、実に様々なジャンルの本に接することができた。勉強するのに使う学術書や娯楽小説はもちろんのこと、エッセイやルポルタージュといったノンフィクションなど、これまで全く興味のなかった分野の本も多く扱うので、次第にこれらの本にも興味がわいてきて、以前のように偏らずに広いジャンルの本を読むようになった。

次に、勉強する時間が増えた。図書室ではほとんどの時間カウンターに座っているので、私は業務の合間に勉強することがしばしばあった。テスト期間などはテキストを持ち込んでテスト勉強をしていたくらいである。よって、家に帰ってただらしていた時よりぐっと勉強量が増え、レポートなども早めに終わらせることが出来た。このように、業務時間中に勉強が進められるアルバイトなど他には絶対ないと思う。

また、業務時間が5時から2～3時間程度なので、自分の時間があまり取られないというのも大きなメリットである。

最後に、図書室の職員の方々は、みんなが図書室をより気持ちよく利用できるように、目に見えないところで様々な努力をされているということがわかった。まさに縁の下の力持ちである。これもまた図書室のアルバイトをしていなかったらわからなかったことだ。私も残り少ない期間ではあるが、図書室に来館された方が気持ちよく使えるように、しっかりと努めたいと思う。正直に言えば、来年もこのアルバイトを続けたいところだが、そうはいかないのが非常に残念である。来年度は改装された新しい図書館となり、業務内容もこれまでとは少し異なるかもしれないが、それでも得るものはたくさんあることだろう。4年生になったら是非やってみてほしいと思う。

第33回 校内読書感想文コンクール!

本年度の校内読書感想文・作文コンクールを行い、下記の作品が入賞となりました。
来年度も校内コンクールを実施予定です。たくさんの応募をお待ちしております。



選考結果及び作品紹介

読書感想文

区 分	作 品 名	学年組	氏 名
優 秀 作	「高瀬舟」	2年4組	立 山 千 晃
優 秀 作	エンジェル エンジェル エンジェルを読んで感じたこと	1年2組	上 村 真 凜
優 秀 作	「きよしこ」	1年2組	樋 口 佳 奈
佳 作	「きよしこ」を読んで	1年1組	工 貴 大
佳 作	「きよしこ」を読んで	1年1組	早 田 有 里
佳 作	「走れメロス」を読んで	1年1組	松 田 溪
佳 作	「納棺夫日記」を読んで	1年1組	村 上 槇 梧
佳 作	「きよしこ」を読んで	1年2組	福 原 優 奈
佳 作	「塩狩峠」	1年3組	片 岡 千 知
佳 作	「高瀬舟」を読んで	1年3組	田 浦 龍 成
佳 作	「走れメロス」	2年1組	鈴 木 清 羅
佳 作	「黒い雨」を読んで	2年1組	田 中 悠 貴
佳 作	「美丘」	2年2組	門 岡 一 歩
佳 作	「吾輩は猫である」の真意	2年3組	井 上 雅 崇
佳 作	約束	2年3組	橋 本 真 理
佳 作	超訳 ニーチェの言葉	2年4組	倉 永 康 博
佳 作	死後の世界とは	情報工学科3年	渡 邊 大 寿



「喜助は幸せであったのだろうか。」この本を読み終えたとき、その疑問がどうしても頭を離れなかった。なぜかという、喜助という男はとても悲しく、辛い体験をしたのにも関わらず、本の中の彼はいつも楽しそうに話をしていたからである。そもそもこの話は、江戸時代、京都で罪を犯し遠島をお上に申し渡された喜助という男と、彼を護送することを命ぜられた同心羽田庄兵衛が、京都に流れる高瀬川を行き来する高瀬舟に乗り、大阪まで行くという話である。庄兵衛は、弟を殺してしまった喜助と話をすることで喜助と自分との違いに気づくのである。

最初に書いたように、喜助は弟を殺している。その罪を償うため遠くの島に行くというのに、喜助は悲しむのではなくむしろ楽しそうにしていたのだ。なぜ悲しまないのか、疑問に思った庄兵衛は喜助にそのことを聞いた。すると喜助は、悲しいと思うのは世間で楽をしているからであり、悲しいというより、むしろ命を助け島にいていいと言われたことがありがたいと言うのだ。この理由を聞いて、私は喜助に世間を楽に生き、幸せであるだろうと責められているような気がした。確かに喜助に比べれば幸せに暮らしている、だからこうも罪悪感があるのかもしれない。しかし、喜助は楽に生きている人をねたむことも羨むこともなく、自分を生かしてくれたお上に対する感謝の気持ちを持っていたのである。なぜ彼がそんなにも明るく物事を考えられるのかますますわからなくなった。

そもそも私たちにとって「幸せ」とはどのようなことなのだろうか。生きていること、家族が健康であること、それとも、お金に困らないということだろうか。それは人それぞれだが、喜助は牢を出るとき、200文の鳥目をもらっており、初めて自分の懐にお金を持っていると喜んだのである。そして、そのお金を元手に島で何かしたいというのだ。200文とは大した金額ではないが、お金がなければ生きていけないので、喜助にとっては嬉しいことかもしれない。

だが、それだけで素直に喜びを覚えるということは欲があまりないように私は感じた。そして、この話を聞いた庄兵衛も、自分とお金の桁は違えども、同じような生活を送っているにもかかわらず喜助に比べ、生活に満足感や幸せを得られていないことに気づき、そして、次から次に何かを求めるのではなく、喜助は何かを求め続ける事をしないよう踏みとどまっていることにも気がつくのである。それは、とても当たり前のことであるのに、私には全く気がつかないことであった。私は自分の性格や能力などで、たくさんのコンプレックスをもっていた。なので、自分がだれかより劣るとどうしても他人をねたんだり羨んだりする癖があった。だから欲張らないことの大切さに気がつかなかったのであろう。そのせいで悪いところばかりが見えるようになり、自分の良いところや幸せであることに気が付けなかったのである。喜助もこれに気が付いていたからこそ、不幸な面ばかりを見てそのことを引きずるのではなく、幸せな面を見たのではないだろうか。だからあんなに明るくふるまうことが出来たのではないか。やはり、どう考え行動していくかが大切なのではないのだろうか。

しかし、どう考え方を変えたにしろ、弟を殺しているのである。喜助は悔やんでないはずがないだろう。そもそも、喜助は小さい頃に両親を亡くし、家族は弟だけであった。二人は互いに助け合い生活していたのだが、ある日から弟は病気で働けなくなり喜助は一人で弟の分も稼がなくてはいけなくなった。そんな時、いつもように喜助が家に帰ると、弟はどうせ治らない病気ならば早く死んで少しでも喜助に楽をさせてやりたいと自分で喉笛を剃刀で切ったのである。しかし、それでは死にきれず、喜助に喉笛に刺さった剃刀を抜いて死なせてくれと頼むのであった。弟の苦しそうな顔を見て喜助はその剃刀を抜くのである。私には、これが殺人とはどうしても思えなかった。法律上確かに人を殺しているのが罪になるが、だからと言って喜助をとがめるには悲しすぎるからだ。こんなことがあってもなお、喜助が明るくいられたのは、もしかしたら、弟の兄に幸せになってほしいという気持ちがあったからなのではないだろうか。なぜなら、ここで喜助が苦しめば、弟の死も思いも意味がなくなると思ったからだ。こんな簡単に喜助が考えたとは思えないし、私のこう

ならいいのと思う願望なので当たってはいないかもしれない。しかし、結局喜助の気持ちなんてわからないのだ。たとえ喜助が幸せでなかったとしても、その後どうしたのかが大切だと思うので、喜助が明るくふるまったことは良いことだと思う。私も何か辛いこと、悲しいことがあっても、その後どう行動するかをよく考え、辛いことにも負けないような行動をしていきたいと思う。



誰にでも、月日経っても忘れられないような出来事がないだろうか。良い出来事ではなくて、自分のしてしまった過ちの中で。そして今でも後悔していないだろうか。

この物語「エンジェル エンジェル エンジェル」にも、過ちをずっと後悔する一人の人間が出てくる。名前はさわこ。さわこは、その過ちを後悔し続けたまま年を取り、今は介護を必要とするようにまでなった。さわこを介護するのが、考子の母親だ。考子とは、この物語の主人公である。考子には、優等生でいなければならないという使命感があり、毎日無理をしていた。そんな考子は最近、精神的に落ち着かせる何かが必要だと感じ、熱帯魚を飼い始めようと決心する。そして飼い始めた熱帯魚の水槽で問題がおこる。入れていた一匹のエンゼルフィッシュが他の魚を攻撃して殺してしまうのだ。そして最後に、このエンゼルフィッシュも死んでしまう。この様子を見ていたさわこは、幼かった時の自分と、エンゼルフィッシュを重ねていく。

自分の過ちを後悔するというのはよくある話だ。さわこの場合は、自分が尊敬する二人が親密な関係にあると知り、ちょっとした寂しさを感じ始めてしまった。そしてその二人に抱いてはいけない感情を持ってしまう。その人の失敗を願ったり、小さなことで文句をつけたりしてしまっただけだ。さわこは自分のことを悪魔だと思い、ずっと後悔し続けることになってしまった。そして、自分と同じようなこと

を平気でしているエンゼルフィッシュがどうしても許せなくて、さわこはエンゼルフィッシュを激しく批判する。

この「エンジェル エンジェル エンジェル」を読んで思い出すのは、数年前のことである。幼かった私には、人よりも優位に立っていたい、というバカバカしい考えがあった。だからみんなに好かれている友人がどうしても羨ましくて、わざと友人の嫌がるようなことをしたり、陰口を言ったりしてしまった。それがバレないうちは気分が良かったのだが、バレてしまってからが地獄だった。失ってから気づくとはよく言うが本当だ。私は友人の大切さに改めて気づき、そして後悔した。今でも思い出す度に、胸が痛む。

しかしここで、さわこに希望を与えた人間がいる。「考子」だ。攻撃を止めないエンゼルフィッシュに向かって「卑怯者、蝙蝠、悪魔、仲間殺し。」というふうな言葉を浴びせ続けるさわこを見ていた考子はこう言った。

「さわちゃん、前に、私がああ水槽の創造主だって、言ったでしょ。そしたらエンゼルがああいうことをするような条件を整えてしまったのは私なんだ。エンゼルばかり責めちゃかわいそうだよ。」

この言葉は、さわこを救ったであろうし、私も救ってくれた。別に言い訳するわけではない。私や、さわこがしてしまったことは、許されることではないのは分かっている。しかし神様が、過ちを犯した自分を慰めるような、考子のような考えを持っていたとする。そのことは、私の気分をどれだけ軽くしてくれるだろうか。

例えばさわこの犯してしまった過ちが、回りの状況のせいだと考えてみる。尊敬していた二人に裏切られたような感覚に陥り、それに追い打ちをかけたのが、周りだ。自分の中の歪んだ感情を無くそうとしていたさわこだったが、周りの友達からの賛成を受けたせいで、ついには行動に移してしまった。でももし、周りからの賛成がなかったら。こういった条件を整えてしまったのは、この世界の創造主なんだ。だから仕方ないよ。そう一言、言ってもらえたら、さわこは、こんなに長く自分を悪魔だと思い続けなかっただろう。

誰だって後悔していることがある。もちろん私にもある。でもそのことを責め続けるべきではないよ、

という意見をこの本は教えてくれたんだと思う。私自身がこの本から教わったことが沢山ある。一人一人この本の中から感じることは違うと思う。私がここに書いている意見にも批判意見が当然あるだろう。だからこそ、一人でも多くの人に読んでほしいのだ。そして、自分なりの答えを見つけ出してほしい。

誰もが経験するような過ちがある。その暗闇にあえて光を当ててみる。著者である梨木香歩さんのこの世界観から、私はしばらく抜け出せないだろう。自分の過ちを今でも後悔している人。今現在の自分の生き方が好きになれない人。そんな人達に、ぜひこの本を読んでほしい。何か救われるような言葉があるわけでもないが、きっとこの物語と自分を重ねられずにはいられない。この本から学べることが沢山ある。そしてそれらはきっと、自分の財産になる。私は今現在、3回この本を読みなおした。なぜならば、読めば読むほど発見があるからだ。その発見を自分なりに解釈し、これからの人生に活かしていこうと思う。



「誰にでも積極的に話しかけてごらん。誰も嘸みついてきたりしないから。」

中学校の卒業式の日、担任の先生が笑顔で私にくれた言葉だ。「きよしこ」を読んでいる途中何度もこの言葉が蘇ってきた。

この小説の主人公の少年きよしは、伝えたい、知ってほしい思いはたくさんあるのに、その多くの思いを言葉にできなかった。吃音という少年にとってとても大きな壁があったからだ。私も同じだ。私は吃音に悩まされているわけではない。けれど、自分の本当の思いを言葉にすることはとても苦手だ。心の中には伝えたいけれど伝えられない、たくさんの思いがあり、少年と同じように伝える勇気がないのだ。私はこの小説の中で少年がどうやってこの壁を乗り越えていくのか、とても興味があった。だからこの小説に強く惹かれたのだと思う。

「——君が本当に伝えたいことだったら…伝わるよきっと」

この言葉は、きよしが強くあこがれるきよしこからきよしに向けられた言葉だが、積極的に自分の思いを伝えられなくなった私にも向けられているように思えた。ただ言葉にするだけでなく伝えようと心から思うことが大切なのだと。

私が3年前に卒業した小学校は同じ学年に女子7人男子4人というとても小さい学校だった。その頃の私はまだ積極的に自分の意見や思いを言葉にすることが苦手ではなかった。むしろ、学級会で発表したり、意見をまとめたり、リーダーなどの仕事につくのが好きだった。クラスメイトの人数が少なく寂しかったが、そのぶん全員が友達で誰のこともよくわかっていると思っていたし、私も自分のことをなんでも話していた。けれど中学校に入学すると、今までのようにはいかなかった。クラスが3つ、同級生が86人となり、初めてたくさんの同級生ができた。しだいに親しい友人もできたが、自分と異なる考えをもつ人が、たくさんいることに気付いたと同時に、今までは積極的に思いを口にしていたが、私が自分の意見や思いをうちあけても、理解してくれないのではないかと思うようになった。そうして、相手に本当の気持ちを伝えることが減っていった。

けれど、きよしの言葉に勇気もらった今、私はもっと自分の気持ちや思いを言葉にしたいと思えた。

「きよしこ」は私に思いを伝える勇気をくれただけではない。差別やいじめについてを改めて考えさせてくれた。

私は15年の人生の中で、きよしのような吃音をもった人に1度だけ出会ったことがある。彼女は私より2つ学年が上の先輩だった。きよしのように吃音が重いようには見えなかったが、彼女も人前で話をしたり、全校集会で作文を読むと、言葉をどもらせていた。周りの人にかげで、からかわれていることもあった。この頃は「どもる」ということや「吃音」について、まったく知らなかった。けれど「きよしこ」を読んでいくうちに、彼女も吃音だったということに気がついた。私も周りと一緒に彼女をからかうことはなかったものの心の中で「ちょっとおかしいな。」「かわいそう」と思うことがあり、彼女のことをちゃんと理解できなかった。

きよしも幼いころ「吃音」を「障害」だと言われたり、いじめられたり、吃音を理解してくれる人に出会わなかった。けれど、もしきよしは吃音を理解してくれる人にはやくから出会っていたらどうだっただろう。きっと、もっと自分に自信をもていただろう。多くはなくても友達もできたのだろう。私ももし障害や吃音をもっていると同じだったと思う。

私が今、きよしや彼女に会うことはできない。けれど、これから出会う人が、どんなハンデをもっている、今までの私のように同情で終わらせてはいけない。心から理解できる人になりたいと強く思った。

「きよしこ」はたくさんのことを私に与えてくれた作品になった。まず第一に、心の中の思いを伝える勇氣。今まで、たくさん思いがあったものの心から伝えたい、伝わってほしいと思うことがなかったことに気づいた。けれど、言葉にして、そして心から伝えたい。第二に、相手を理解するということ。「いじめ、差別はいけない。」幼い頃から何度もいわれているけれど差別やいじめは、もしかしたらなくなるかもしれない。私はなくならないと思っている。けれど、相手を心から理解し、多くのことを知ることで、差別やいじめは減るのではないかと考えた。

「君が話したい相手の心の扉は、ときどき閉まっているかもしれない。でも鍵は掛かっていない。鍵を掛けられた心なんてどこにもない。」

私もそう信じている。



きよしこ、私がこの本を初めて手にしたとき題名からは全く内容が想像できなかった。表紙には、少しうつむいた少年が描かれていた。

この物語は吃音により言いたいことを言えないことが多い日々を過ごす主人公「きよし」の少年時代のお話だった。

私はこの本を読み終えて、中学校の時の先生が

おっしゃっていた、思いやりについての話を思い出した。その話は先生が以前勤めておられた学校の総合的な学習の時間の話で、中学生が障害のある方の講話を聞き、それに対するお礼の言葉として「今後は大変な思いをしている人がいたら手伝ってあげたいです。」というような内容の言葉を言ったそうだとするとそれに対し講話をされた方が「気持ちはありがたいが、それは違う。」とおっしゃった。「手伝ってあげたい」の「あげる」という言葉からは自分たちが「してもらう立場」になってしまう。障害があっても自分でできることはするし、障害があるというだけで何でもしてもらう立場にはなりたくないということをおっしゃったようだ。

この「きよしこ」にも似たような場面があるように思う。少年とワッチの話だ。ワッチはとても優しく、少年が詰まってしまった言葉も先回りして通訳してくれる。少年もワッチといると温かいものに包まれているような気持ちになる。しかし少年は地元の大学ではなく、ワッチとは離れてしまう東京の大学を受験することにする。喫茶店でそのことをワッチに伝えるとき、少年はいつもワッチに注文してもらっていたオーダーを、言葉が詰まってしまうことを承知で自分で注文する。もうこれからは、通訳してくれる人もいないし自分の思いは自分で伝えていかなければならない。そういう気持ちの表れだ。もちろん少年のこの行動は先に書いた「してもらう立場」を嫌がったものではないが、少年の心の中にも「いつまでもワッチに頼っていていいのだろうか、ワッチの通訳があわないうちも自分を納得させて自分の思いを伝えられないままでいいのだろうか。」という思い、吃音という障害があることによって「してもらう立場」になってしまうことを厭う気持ちがあったのではないかと私は思う。自分の思いを伝える……これは誰にとっても難しいことだ。言葉のイントネーションが少し違っただけで違う意味にとられたり、言いたいことを言うか言うまいか悩んだり。しかし人は社会で、みんな、生きている以上、思いを伝えあっていかなければならない。「きよしこ」のなかで少年にきよしこが言う台詞がある。『抱きついて話せるときもあれば、話せないときもあると思うけど、でも、抱きついたり手をつないだりしていれば、伝えることはできるんだ。それが、君の本当に伝えたいことだったら……伝わる

よ、きっと』ここでの抱きつく、手を握るという動作は、自分と相手それぞれが、相手に思いを伝えようと、また、相手の気持ちをわかろうとして心と心、思いと思いがつながる、そんなことのとえじゃないかと私は思う。伝えたいという気持ちが強ければ聞く方もそれを感じて聞こうとしてくれる……つまり、伝えようとすれば、きっと思いは伝わる。

思いやりでも心のつながりが重要になると「きよしこ」を読んで感じた。最初の話に戻ると、中学生の思いと障害を持つ人の間にはちょっとしたずれがあった。やはり、自分の気持ちを一方的に相手に押しつけるだけではいけない。お互いが相手のことを考えて、気持ちを伝え合うことで思いのすれ違いは無くせ、思いはつながる、きっとそうだと思う。私自身にもコミュニケーションの取り方にはたくさんの問題点があるように思う。人と話すときに相手の目を見て話す。相手が傷つくような言葉遣いや、そんな言葉を言わない。当たり前のことだが、自分を振り返って見ると果たして、できているだろうか。例に挙げたこと以外にも、問題点はたくさんあると思う。人が生きていく中で、「伝える」という動作はなくてはならない。そんな「伝える」ということをきちんとできるような人間になるために、私はまず挨拶から始めようと思う。家族や友達とも挨拶からしっかりコミュニケーションを取り合い、少年のように「思いを伝える」という気持ちを持って、自分の気持ちを正直に周りの人に伝えていければと思う。そして、自分の思いだけでなく、相手の思いも大切に、自分から相手の手を握っていきこうと思う。きよしこと少年のお話を心にとめて、気持ちがつながりあうような毎日を過ごしていきたい。

思いを伝えることは難しいけれど大切なことである……そんな当たり前のことを「きよしこ」が再認識させてくれた。



「きよしこは言っていた。『それがほんとうに伝えたいことだったら…伝わるよ、きっと』」

「吃音」——。今まで耳にした事もない言葉だった。話すのが好きな私には、何の関係もなかったから。しかしきよしは、この吃音によって多くのことができなかった。伝えたいのに、伝わらなくて、いや、伝えられなくて…。きよしはそんな自分が嫌で嫌で仕方がなかった。…そんな時、きよしは「きよしこ」と出会った。もし、きよしがきよしこと出会わなければ、きよしこという存在を作らなければ、今でもひどい吃音で悩んでいただろう。伝えたいことを伝えられずに、自分の心を閉ざしたままだったであろう。もしそうならば、お母さんやお父さんとも、加藤くんとも、おっちゃんとも、石橋先生とも、ゲルマとも、大野くんとも、ワッチとも、話すことなんてできなかった。しかし、きよしこと出会ったことで、きよしの吃音が完全に治ったわけではなく、今まで出会った人たちはたまたまきよしの伝えたいことを言葉なしにだいたい理解してくれる人だった、ということであろう。特に最後のお話に出てきたワッチなんかは。きよし自身も、確かに着々と吃音は治ってきていた。小学生時代と高校時代となんかを比べると、ものすごくわかる。たくさんの人と出会って、話して、笑い合って、時には裏切って…。そうやってきよしは成長してきた。自慢の作文も、きよしの人生に良い方向で大きく影響した。きよしの作文力は、石橋先生や、6年3組のみんなとの絆を深めることができたし、言葉以外で伝えたいことをうまく伝える、という面でも役立った。きよしは、一度だって自分を飾ったことはなかった。「ほんとうに伝えたいこと」を胸に、ただただきよしこが来てくれるのを願っていた。そして、今まで自分を支えていた柱を全て取り除き、「ほんとうに伝えたいこと」を言葉で伝えられるようになった時、本物のきよしこと出会った。——きよしこは、きよしが昔から思い描いていた理想の自分だったのである

う。空想の中のきよしこが、今、自分という形で現実にいる。ずっと待っていたであろう。何年も待って、待ち続けて、やっと会えた。きよしは、ようやく「きよしこ」になることができたのだった。

私の中学の同級生で、Mくんという少年がいる。この少年も、いわゆる吃音というやつであった。3年の半ばから、わけあって保健室登校となった。Mくんは、中学生のころのきよしののように、うまく言葉は出せなくても自分の意見をぶつけられるようなタイプ、ではない。…Mくんは、「きよしこ」に出会えるだろうか。Mくんがきよしの存在をつくっているかも分からない。しかし、「すらすらしゃべりたいな」とか「外に出て思いっきり騒いでみたいな」とか思ったことは必ずあると思う。自分の伝えたいことを相手にストレートに伝えたい、という気持ちもあると思う。でも、私たちがMくんの所に遊びに行ったり、給食を一緒に食べたりした後の、Mくんの「ありがとう」という思いは、口に出さずとも何となく分かる。顔を見れば、表情を感じ取れば、何となく。…何なのだろう。言葉に出さなくとも、「ほんとうに伝えたいこと」は伝わる時もある。しかし、思っているだけでは伝わらないのが当たり前である。だからこそきよしは今まで吃音で悩み続けていたのであったし、うまく言えなくて友達に「ほんとうに伝えたいこと」を勘違いされたこともあった。私は「伝える」ということがあまり分からなくなってきた。

しかし、この「きよしこ」を読んで確かに分かったこと、文章を書いていて気付いたことは、気持ちは言葉を上回る、ということである。きれい事だったら、いくらでも言える。それによって、たくさんの人を喜ばせたり、感心させることもできる。しかし、「ほんとうに伝えたいこと」以上に相手の心に響くものはない。本当に相手に伝えたいという思いで言ったことでなければ、聞いていた方は自然と忘れてしまうものである。しかし、必死で自分の思いを伝えようとした人、「ほんとうに伝えたいこと」を伝えようとした人の話は、とても印象深く頭に残る。

よければ、M君にもきよしこに出会って欲しい。そして、「ほんとうに伝えたいこと」を、言葉にして、全ての人に伝えられるようになって欲しい。

そして私自身も、「ほんとうに伝えたいこと」を

相手に伝えられる人になりたい。これからの社会は自分の思いをどう主張できるかが問われてくる。だからこそ、私は自信を持って、きれい事ではなく、自分の思いを伝えられる人になりたい。「ほんとうに伝えたいこと」を言葉に変えて、全ての人に伝えたい。他人に流されず、自分の口で。



物語は、人を信じることができず、人民に対し暴虐な行いをする国王ディオニスのもとへメロスが向かう場面で始まる。メロスは、自分を殺す気である国王に、友人セリヌンティウスを人質として差し出し、処刑までに3日の期限が欲しいと言う。願いが聞き入れられたメロスは、急いで自分の村へ戻り、妹の結婚式を挙げ、様々な困難を乗り越えながら、町に再び辿り着く。自分が殺されるというのに戻ってきたメロスを見て、王が改心する、という形で幕は閉じられる。

しかし、この物語には、おかしな点が二つある。それは、町へと走るメロスのもとに現われた山賊と、終盤でのメロスの、

「恐ろしく大きいもののために走っている。」

という台詞。もっと詳しく言うと、メロスは戻って来ないと思っているはずの国王が、メロスを妨害するために山賊をよこした点と、セリヌンティウスを助けるために走っていたはずのメロスの目的が変わっているという点だ。

これらの謎に対する答えには、国王が深く関わっている。まず、国王が山賊に命を下した理由から考える。国王は人を信じておらず、メロスは絶対に帰ってこないと思っている。なので、山賊にメロスを襲わせることには、何の意味も無いはずである。それでも国王は、山賊にメロスを襲うよう命令した。ということは、国王の心の中には、ほんの微かだが、「メロスはもしかしたら戻ってくるのではないか。」という疑念があった、ということになる。このことに対し、国王はその微かな可能性すら潰し、なにか

なんでもメロスを嘘吐きの汚い人間に仕立て上げようとするほど残忍な性格をしているだけだという答えも導き出せる。しかし、ここでもう一つの答えとして導き出されるものがある。それは、国王は人を、メロスを信じたがっているのではないかというものだ。国王は相当の人間不信で、自らの思い込みだけで人を殺してしまうほどだ。人間不信のために人を殺し続けているのだから、国王が人間不信を治したい、つまり人を信じたいと思うようになることは、何らおかしいことではない。だが、そう考えるとまたここで矛盾が生じてしまう。それは、メロスに帰ってきてほしいと思っているのに、国王は山賊に命令してメロスの帰りを妨害したという点だ。しかしこの矛盾には、ちゃんと理由がある。先述の通り、国王は相当の人間不信だ。ならば、それを解消するには、生半可なものでは不十分である。だからこそ国王は山賊を遣わしたのである。様々な困難を乗り越え、友人を助けるために、そして自分が殺されるためにメロスが戻って来たのならば、自分は人を信じることができると、国王はそう考えたのではないか。つまり、国王がメロスのもとへ山賊を遣わしたのは、「人を信じたい。」という思いからの行動だったといえる。

次に、終盤でのメロスの台詞にあった「もっと恐ろしく大きいもの」とは何か、ということについて考える。

このことの矛盾点は、先述の通り、セリヌンティウスを助けるために走っていたはずのメロスが、終盤で突然、「間に合う、間に合わぬは問題ではないのだ。人の命も問題でないのだ。わたしは、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」と言い出し、走っている目的が異なってきている点だ。今までは、セリヌンティウスのために走っていた。しかし今は、人の命よりも大きいもののために走っている。ならばその大きいものとは何なのか。これに対する答えは、実は文章の中にある。それは、メロスが再び町へ向かう直前の文の「あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう」という文だ。つまりメロスはこの時点で、王に人を信じる心を取り戻させることを少なからず目的としていたことが窺える。つまり、メロスの言う「もっと恐ろしく大きいもの」とは、国王が人を信じるようになら

ず、今のままの状態が続くことだといえる。メロスはこのことを完全に理解していたわけではなかったが、生来の正直な性格から、直感で感じたのではないだろうか。まとめると、メロスは国王に人を信じる心を取り戻させるために走っていた、ということだ。

私は、この作品から、人を信じることの大切さと、人を信じることができないことの恐ろしさを学んだ。この作品の良い点は、浅く読んでも、深く読んでも楽しめる点だと思う。単に物語として読んでも、文学作品として読んでも面白く、非常に良い作品だと思う。太宰治の著書は、他にも「人間失格」を読んだが、内容が陰鬱で、物語としては楽しめるものでなく、文学作品としては、私には難しく、よくわからなかった。その点、この「走れメロス」は物語として楽しめて、文学作品としても比較的簡単なので幅広い世代で楽しめる素晴らしい作品だと思う。



自分が決めたことを諦めず一生懸命に真心を込めて行えば必ずや何事も成就することを信じる。

私に母方の祖父はいない。私が生まれる1年前(17年前)に亡くなっているからだ。地方公務員を定年退職した直後に体調が悪いと病院に検査に行きそこで胃癌が見つかったそうだ。その時病院から告げられた言葉は余命3ヶ月だったそうだ。とても元気よく剣道5段の資格を持つ祖父は叔父が行う剣道場に暇を見つけては指導に行き、子供たちにも人気のある先生だったそうだ。もちろん孫たちにも県道を教え、いつでも元気よく一緒に遊んでくれる祖父だったらしいのだ。

でも私には、そんな祖父との思い出が全くない。だが、私が小さい時からかわいがってくれた大叔父がいる。祖母の弟である。祖父が亡くなった後、よく祖母のことを気にして来てくれていたのだ。

その時私は幼かったので、大叔父はよく一緒に温泉や旅行に連れていってくれた。私にとっては祖父

的存在の人だった。大叔父は私が通うこの熊本高専の横を走る、菊池電車で勤めていた人だった。定年退職後、私たちを色々な所へ連れて行ってくれたのだ。大叔父は私が一緒に車に乗ると、道路標識の説明や地理や地形についても教えてくれた。また、行き先でゴーカートにのって運転の仕方を教えてくれたのも大叔父だった。楽しい思い出が一杯ある。だから私はその大叔父を祖父のように慕っていたのだ。

そんな大叔父も3年前に病気で亡くなった。その時に私は初めて葬式に参列したのだった。中学校生活を忙しく過ごしていたときだったので私は大叔父の弱っていく姿はほとんど見ていなかった。大好きだった大叔父の最後の姿を、母は私たちに見せたくなかったらしいのだ。

大叔父の所へよく看病に行っていた母から告げられた言葉、「もう大叔父もだめかもしれない」と聞いた時は本当にショックだった。私には元気いっぱい大叔父の姿しかなく、それが想像出来なかった。

だから、棺に入れられた、弱った姿の大叔父を見て悲しかった。葬儀は菊池電車が通る場所にある葬儀社で行われた。出棺のときにちょうど菊池電車の汽笛が鳴った。私はその時、大叔父の新たな旅立ちを知らせてくれたのだと感じた。家族の人たちもその音に耳を傾けていた。みんな涙が止まらなかった。

その頃だったと思う。私は第81回アカデミー賞外国語映画賞、および第32回日本アカデミー賞最優秀作品賞受賞作品の「おくりびと」を映画で観てとても感動した。だから、今回私は青木新門作の「納棺夫日記」を読みたくなった。「納棺夫日記」は映画で見た内容とは違ったけれど内容の深さに感銘を受けた。

なぜ特殊な納棺師という職業を選んだのだろうかと思ふ不思議な気持ちでいた。この本は、著者が体験した記録であったため、その理由を知ることが出来た。

著者は大学を卒業後、富山市内の飲食店を営んでいたが倒産。小銭も底をつき、自分の息子のためのドライミルクを買う金がないということで新聞の求人欄に記載されていた「冠婚葬祭互助会」の仕事の面接に出向いた。

玄関を開けた時、入口にお棺が積んであるのを見て自分はとんでもない所へ来てしまったと気付いたそう。彼の仕事の内容はやはり過酷なことばかりであったようだ。時には事故や自殺などの現場で変

わり果てた姿。人間の体を清めて棺に納めるなど想像以上に辛かったと思う。

また、分家の叔父から一族の恥だとののしられ、一時期は妻からも「穢らわしい、近づかないで」と拒絶されたそう。鋭い刃物で切り付けられたような衝撃を受け、罵られても著者が納棺の仕事をしたのはなぜだろうと改めて考えた。

出世や成功は突然やってくるものではないのだ。日々の地道な努力の積み重ねがあってこそおのずともたらされるのだ。まず、自分の役割をおろそかにせず、今やるべきことに全力を尽くし、一步一步を確実にやり遂げることで成功への階段を昇って行くのだ。

「為せば成る、為さねば成らぬ 何事も」

自分が決めたことを諦めず一生懸命に真心を込めて行えば必ずや何事にも成功することを信じるべきだと私は思った。

激しく変貌する現代社会。高度な技術が進む中であっても納棺の際は人間の手で行う。故人がどのような人だったとしても人の手で、その温かい手で最後に送ってあげている。この日本の素晴らしい風習に私は胸を打たれた。

人がこの世を去った日、その人に対する恩と感謝を忘れないために、大切な人の思いに応える一生を貫くためにも「あの人が今の自分を見たらどう思うか」と自問自答していき、故人を偲ぶ機会には時間が許す限り参加して、大切な人の思いに応じて行きたいと思っている。



私はこの本を読み終わったあと、一人の男の子の顔が頭に浮かんだ。その少年の名前は…Y君とでもしておこう。私とY君は、幼稚園・小学校・中学校と同じ学校の同級生だった。クラスも何度か一緒になったことがある。Y君もこの本の主人公である少年と同じようにうまく言葉を話すことが出来ない。私は一度、「何故、Y君はあんな話し方なのか。」と

友達に聞かれたことがある。私もまだ幼かったので何も友達に返事をするのが出来なかった。

月日は経て、私は小学校3年生になり、初めてのクラス替えがあった。そして初めてY君と同じクラスになったのだ。私は正直同じクラスにはなりたくなかった。しかし、私とY君のクラスのメンバーはとてもよく、Y君と同じクラスのことはあまり気にしなかった。

ある朝、私が友達と学校に登校すると、Y君は他クラスの人から意地悪をされていた。私と友達は目を見合わせ、どうするか迷っていた。

すると、私のクラスメイトが教室から出てきて「やめろよ。」と言ったのだ。私は正直びっくりしてしまった。なんせY君を守ったのだから。私はY君は話し方が変だから意地悪されてもあたりまえなのでは…と心の中では思っていた。だからクラスの人「やめろよ。」という言葉は私にも言われているような気がした。次の日から私は少しずつY君に話しかけるようになった。Y君に話しかけると、ちゃんとY君も話してくれた。

それと、一つ気付いたことがある。それは、Y君の周りにはたくさんの仲間がいたことだ。私は同じクラスだったのに気付かなかったのだ。Y君の周りの人は、いつもY君をサポートしていた。

この本の少年もきっと気づかないうちにたくさんの人にサポートされていたのかなと思った。だけどサポートされるのは、みんなと違うからだ最初は思っていた。しかし、この本を読んでいるうちに、その考えは間違っていることに気付いた。

Y君と本の少年には似ている所がある。それは二人とも何事にも一生懸命であるということだ。

私の中学校では、“一生懸命はカッコイイ”という言葉があった。私はいつもその言葉を聞くたびに、「どうせ、きれいごとだろう。」と心の中で思っていた。だけど先生はそんな生徒達に、「一生懸命すればカッコイイ。それに、必ず誰かが見ている。」と言っていた。私は言葉の意味がその時は全然理解出来なかったし、理解しようとも思わなかった。

けど、今考えてみるとこの言葉の意味がなんとなくだけ理解できる気がする。なぜならその言葉はY君と少年にあてはまっていると思うからだ。だから二人の周りには人がたくさんいるんだと思った。

そして私も含め周りの人は、一生懸命なY君と少年をサポートしてあげたくなるんだと思った。

そして、私も二人のような人になりたいと思った。今までの私は、最初は「やるぞ。」と言っている、結局口だけだったり、やる気がなくてダラダラだったり…。どう見ても一生懸命の態度ではなかった。当然、私をサポートしてくれる人はいなかった。でも、その事を私はいつも誰か違う人のせいにしてたんだと思う。これからは、ちゃんと一つ一つの事を一生懸命にやっていき、失敗してもくじけずに、何故失敗したのかを反省していきたい。

最後に。私は『きよしこ』から、たくさんの事を学んだ。

特に私が考えさせられたのは、人の外見と中身についてだった。世の中には、色々な人がたくさんいる。例えば、少年のように上手に話せなかったりする人もいる。目が見えない人や耳が聞こえない人、体が不自由な人もいる。私は今まで、そのような人を障害者と呼んでいた。

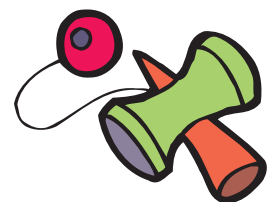
しかし、そのような人達も中身は私と同じ人間ということの本で読んで教えられた。

私はこれから、たくさんの人と出会うと思う。その中には、たぶんY君や少年のような人、目が見えない人や耳が聞こえない人などもあるだろう。だけどその人達も私と同じように堂々と立派に生きていることを忘れずに接していきたい。

そしてもし、前の私のような考え方をしている人がいたら、どんなに仲が良い人でもはっきりと「違うよ。」と言ひ、私達と同じ人間の一人だということをお伝えしたいと思う。

また、相手が伝えたいことをちゃんと理解したい。

私は『きよしこ』の主人公である少年からたくさんのお話を学んだ。この本に出会えて本当に良かった。





『義人なし、一人だになし』

そんな言葉が目に入った瞬間、強い衝撃が走り、複雑な思いが残った。

私は昔から悪口を言わないとか、みんなに平等に接するとか自分に言い聞かせてきたつもりだ。できることなら人を助けたいと思うし、自分がそれをできている方の人だとも思っていた。

しかし、その思いをあの言葉に否定された。私の今までの生き方や理想像をあっさりと打ち破ってしまったのだ。

納得がいかず、怒りさえ感じた。正しくあろうとするのに、正しくないと言われては、何もできないではないか。別に自分が特別偉いとは思っていない。ただ私の理想としてきたものが、決して手の届かないところにあるとしても、諦めたくなかったのだ。でも、だからと言って、「いつも正しいことをしているか？」と訊かれても自信を持って「はい」とは答えられないだろう。そういうことを含めて『義人なし、一人だになし』の言葉に、私の心を見透かされたようで、自分が恥ずかしくなり、ずしんとした重りとして心に残った。

そして、その重りは私にささやいてくるようになったのだ。

ある時、一人の友人から相談を受けた。その内容は、「○○ちゃんが怖い」とか「先輩が自分の悪口を言っていた」とかいうものだった。私は真剣に悩んでいる友人に

「そんなの気にしなきゃいいじゃん」

と言った。誰からも好かれる人なんていないから、悪口を言われるのは当たり前なことだ、とも言った。実際、私を気に入らない人もいるだろうし、仕方がないことだと割り切っていたのだ。しかし、それはあくまで私の考え方であって、友人には理解できなかったらしい。案の定、

「ちーちゃんみたいに強い人には分からないよ！」

と言われた。はっきり言って、腹が立った。せっか

く相談に乗ってやって、私なりに励ましたのに！なんだか悪者扱いされたような気分だった。

『塩狩峠』にこれと同じような場面がある。主人公、永野信夫が他人の給料を盗んだ同僚に上司に謝りに行くよう説得するが、突き返されてしまう、という場面だ。この場面を読んだとき、真っ先にあの友人のことが思い出された。

『己の如く、隣人を愛せよ』

私は本当に友人のことをちゃんと想って言ったのだろうか。言われた友人はどんな気持ちだったのだろうか。初めて自分に問いかけてみた。そして、あんな言葉しか言ってやれなかった自分がとても恥ずかしくなった。友人が分かってくれなかった私の思いがあるように、友人にも私には分からない恐怖や不安があったのだ。なんとなく『義人なし、一人だになし』というイエス・キリストの言葉が分かったような気がした。

本の中で、信夫は自ら汽車の下敷きとなり、多くの乗客を救う。誰にでも優しくおおらかで、信頼も厚く、キリスト教という熱い信念を持っていた信夫の犠牲の死をたくさんの方が嘆き悲しんだ。私にとって信夫は理想の人だ。周りの人からは尊敬されているが、自分が偉い人だとは決して思わず、どこまでも謙虚でどこまでも真っ直ぐな人。そんな人になれたらいいな、と思いつつ、許せないことがあったり、思わず人に当たってしまったことのある私は、まだまだ未熟だ。だけど、そのことに気付けた今は、ちょっとだけ前に進めたような気がする。

事実を基に作られている『塩狩峠』を「美化され過ぎだ」と非難する人もいるが、信夫のモデルである長野政雄さんが生前素晴らしい人だったからこそ、あれから百年以上経った今でもその名が忘れられていないのではないだろうか。だから私は、政雄さんの死が事故死や自殺などではなく、乗客を救うための犠牲の死だったと信じていようと思う。

なんとなく抵抗のあったキリスト教の言葉は、時代を超えて今も多くの人を導いている。まだ中学生である私は、宗教とかあまり分からないけれど、キリストの言葉が自分自身の姿を映す鏡のようなものになっているようだ。これからもいろんなところでささやく声がするだろう。

『義人なし、一人だになし』

その度に私は、誰かを助けたり、誰かを許したりす

ることができるかまだ不安なところはあるけれど、「義人」になれないのならせめて「義人」を目指し続ける人であると、天国にいるだろう長野政雄さんに誓おうと思う。



貧困と安楽死。

現在の世の中で問題とされているこの二つ。高瀬舟では、この問題をどう考えていくか、私たちに投げかけていると思う。

物語には、喜助という人物が出てくる。この人物は、自分の弟を殺したとして殺人者として捕らえられる。そしてその罪をおかしたとして、遠い島へ流されることになった。その道中、島流しの手伝いをする役人羽田庄兵衛はこの問題について考えさせられるのであった。

私はこの物語の前半を読んだとき、なぜ喜助は島流しになるのに楽しそうな顔をしていたのだろうかと思った。それに喜助はあまり体格がいいわけではない。なぜそんな人が人殺しをしたのだろうか。いろいろと疑問に思いながら読み進めていくと、どうやら喜助は弟想いが故に殺してしまったらしい。喜助の弟は当時、治らないという病気にかかっていた。そのため喜助は毎日弟のため精いっぱい働いた。だがそれが弟の心を傷つけたのだろう。自分は何もできない。それなのに、兄は一生懸命働いてくれる。そう考えることで自分はなんて情けないのだろうと思う。そして、このくらいなら自分はいない方がいい。そう考えるようになってしまう。これは、人間ならだれにでもいえることではないだろうか。実際、私も同じような経験をしたことがある。

数年前、私はある病気で大変きつい思いをした。いろんな病院をまわったが、なかなかその病気が何なのかかわからず、だんだん症状は悪くなっていった。そのとき私は思った。「なんでこんな病気にかかったのだろう。親に迷惑をかけてばかりで申し訳ない。」と。今はすっかり良くなったが当時のこと

を振り返ると本当に大変だったと思う。だがあの時、私は死のうとまでは考えなかった。それは自分が若いからなのか。まだ社会をよく知らないからなのか。今の私にはわからない。ただ、喜助の弟と違うところはある。それは現代の医学はほとんどの病気を治すことができること。そしていくつもの病院に回ることができるだけのお金があったということ。そう。いろいろ考えていくとこの物語のテーマの一つである貧困という問題について考えさせられるのだ。

現在、この地球に住んでいる60億人をはるかに超える人間。その中には1日に、人が一生かけて稼いだ金を稼ぐ人もいるだろう。しかしそれでも足りないと思っている人もいるかもしれない。だが、そんな人がいる一方で、満足にご飯を食べることができない人も大勢いる。私たちにはいったい何ができるだろう。実際にそのような地域に行ってボランティア活動を行っている人がいる。現地の人とふれあい、話し合い、何が必要なのか支援していく。私はこのような活動が一番いいと思う。だがみんながそのようなことができるわけではない。遠くに行くことができない人もいるだろう。しかしそんな人にもできることはある。スーパーやコンビニに行ったとき、レジの横にはいつも募金箱が置いてある。おつりで小さな小銭をもらったとき、私たちには人のために行動することができる機会が生まれる。その一瞬を大切にしてほしいと思う。

そしてこの高瀬舟のもう一つのテーマ、安楽死についてである。喜助は病気の弟に殺してくれと頼まれる。喜助は最初、医者呼んで来ようとするがそれを恨む目で弟は喜助を見る。仕方なく喜助は弟の自殺を手伝う、という話だ。安楽死という大きなテーマとして考えると、考えれば考えるほど、はたして安楽死がいいのか悪いのか分からなくなる。ただ高瀬舟を読んだだけであれば、やむをえないことなら仕方ないと思うだろう。だがそれは人情や貧困という人の感情を揺さぶる要因があったからであり、もしそれがそこまで感じなければどうだろうか。たとえば競馬で使われる馬。レース中にこけて足の骨を折ったとき、その馬は安楽死という選択がとられる。もちろんそれは馬のことを想ったゆえの選択であり、人の感情をまったく揺さぶっていないわけではない。だがこの行為が高瀬舟のように仕方がないことだと思うだろうか。いや、私は思わない。

なぜならその馬の本当の心はわからないからだ。足を骨折した、馬にとっては致命傷かもしれない。だがそれで死にたいと思うだろうか。

馬に限らずだが、ほとんどの動物は人間に自分の気持ちを伝えることはできない。だから「自分はまだ生きたい。」とか「いや、もう自分はいい。」という本当の心の声は人間には届かない。だから人は結局安楽死という選択をしてしまうのだろう。

高瀬舟という物語。これから考えさせられることは多く、そして難しい。私はこれから専門学校で技術的なことを学んでいく。将来私は動物が何を思っているのかを知ることができ、そして会話ができるような製品を開発したいと思っている。それによって動物の安楽死という問題に少しでも自分がかかわれればと思う。そのためにも私は学校で一生懸命勉強をして、社会に貢献できる科学者になりたいと思う。



「メロスは激怒した。」という有名な出だしから始まるこの物語を知っている人は多いだろう。邪悪に対して人一倍に敏感でとても強い正義感を持った男・メロスが、自分の代わりに捕われの身となった友・セリヌンティウスを救けるために必死になって走る場面が印象的だ。この作品は、以前にも国語の教科書の題材として扱っていたので何度か読んだことはあった。しかし何回読んでも、私は登場人物の、特に主人公であるメロスの考えを理解しづらく感じた。私もメロスと同じように、世間一般に考えられているような悪というものに対しては少なからず嫌悪感を覚えるし、正そうとする。しかしメロスのように、正義を貫き通すために、自分の、ひいては自分の親友の命までかけられるかと自問したとき、そのようなことはとても自分にはできないと考えた。なぜなら、仁義や正義も大切だとは思いますが自分の命を投げ出してまで突き通すようなものでもないと考えているからだ。それに、仮に自らの命をかけて悪

を正そうと話をもちかけることができたとして、そこで自分の親友の命まで勝手に引き合いに出してかけることができるとは到底思えない。また、この勝手な賭けの内容をすんなり受け入れ、メロスのためにひたすら信じて待ち続けたセリヌンティウスにも驚いた。私なら、このような賭けに自分が使われたと知ったら、どんなに信用していたとしてもセリヌンティウスのように友を信じて待つ、というような選択はしないだろう。それは相手を信じていないような行動だと思われるかもしれないが、相手を信じていたからこそそのような行動をされたことに対し憤慨し怒ってもよいと考える。だから私はセリヌンティウスの行動について共感ではできなかった。セリヌンティウスの気持ちがまったく理解できない、という訳ではなく、大体の気持ちは理解できセリヌンティウスがメロスを信頼している証にそのような賭けに加わることを了承したのだということを理解した上で、共感できない。逆に、暴君ディオニスの主張は伝わってきやすかった。それはおそらく、私自身似たような考えを持ち人を疑ってかかっていた時期があったからだと思われる。ディオニス程ひどくはなかったが、周りの人々の言葉が全て疑わしく聞こえ、自分一人が孤立しているように感じるのだ。そういった心の状態であると、やはり他人の言うことをすんなり受け入れられない。メロスの意見も聞いてはくれなかった。しかし、だからこそその次のメロスの提案とその行動力に驚いた。メロスの提案は、妹の花嫁姿を一目見るため、先程書いたように友を人質にとらせて王との約束の時間までに戻って来よう、というものであった。ディオニスは、どうせメロスも自分の命が惜しくなって友を犠牲にするのであろう、と考えてその提案を受け入れた。セリヌンティウスを呼び出し人質として捕えさせ、メロスはこの暴君ディオニスのいるシラクスの町を出て故郷へ向かい疾走した。村へたどり着き妹の結婚式へ出席し晴れ姿を見て、それまでの疲れが一気に押し寄せてきてしまいメロスは眠ってしまった。目が覚めて自分のすべきことを思い出したメロスは、王との約束を守り、自分の身代りとなって捕われた大切な友人を救い出すためにもう一度シラクスの町を目指して走り出す。「殺される為に走るのだ。」この一言がとても印象に残った。雨の中を走り抜け、濁流の流れる川をつき進み、王の命令で襲いかかって

きた山賊を撃ち倒し、メロスは進んだ。しかしここで疲れが頂点に達したメロスは進むことを止めてしまう。ここに来て初めて、メロスの正義の心に対する考えが大きく揺れた。今まで何度か立ち止まりそうになってもこの正義の心を持ち自分を信じ抜くことで猛進してきたメロスの、勇者には似つかわしくないような心が暴露される。この時のメロスの気持ちはとてもよくわかることができた。肉体的疲労が溜まると、とにかく他のことがどうでもよくなるのだ。私ならば、ここで諦めていたかもしれない。メロスはそうではなかった。少し休憩をとり考えをリセットさせて、友のために再び走り出した。約束の時間が近づき、セリヌンティウスが処刑台へ立たされたその時、メロスがその場に現れる。セリヌンティウスの処刑は中止、メロスとセリヌンティウスはお互いがお互いを一度でも疑ってしまったことを心から悔い、互いに殴り合って友情の再確認、暴君ディオニスはその二人を見て今までの自分を恥じて反省し、二人の仲間に入れてほしいと頼み、結果的に二人はこれを了承した。

この話を最後まで通して読んだ後、私の頭にはこの話のイメージが漢字一文字で浮かんできた。それは「義」である。全てがそう上手くいくとは限らないが、時にはメロスのように自分の持つ義を信じて全力で進むのも良いかもしれない。私の考えの大本は最初に述べた通りであるが、この話の意味を踏まえて考えても面白い。



私はこの本を読み、改めて考えさせられたことがいろいろあった。この本は、広島県出身の井伏鱒二さんの書かれた本で、第二次世界大戦末期での広島への原爆投下と、それに伴う惨状や人々の様子を綴った小説である。文中に描かれる3人の家族の運命が、一発の原爆によって狂わされていく様子が克明に描かれている。私は以前、長崎の原爆資料館などに行ったこともあり、原爆の恐ろしさについて、

少しは知っているつもりでいた。しかしこの本を読み、今まで自分は原爆の本当の恐ろしさを知らなかったと思い知らされた。

タイトルの黒い雨とは、原爆が炸裂したときに大気中にばらまかれ、広い範囲に拡散した、極めて有害な放射性物質を含んでいた、被爆直後の雨のことだ。大粒で粘り気があり、とても毒性が強かったため、この雨に打たれた多くの人が、放射能の犠牲になったそうだ。原爆投下時に直接被爆した者だけでなく、家族や親戚の安否を心配して駆けつけた人々も、黒い雨や他の残留放射能からの影響を受けて被爆し、多くの人が亡くなった。また、そうならなくても、放射能によって原爆症を発症し、長い間苦しめられた人々がたくさんいる。被害を受けたのは人間だけではなく、池や川の魚は鱗が剥がれて変色し浮き上がっていく…。

主人公の閑間重松もその内の一人で、放射能を浴び原爆症を患ってしまったため、重労働をすると症状が出てしまう。そのため満足に仕事ができない日々を送ってる。重松は、姪である矢須子の事について、頭を悩ませていた。彼女の縁談が決まらないのだ。それは、縁談が持ち上がるたびに、彼女が原爆症患者であるという噂が流され、破談になってしまうためだった。その誤解を解き、縁談を成立させるため、重松は、自らの「被爆日記」の清書を始めるが、もう少しで清書が終わるといときに、矢須子が原爆症を発症してしまう。結局縁談はなかったことになり、追い打ちをかけるように、日に日に彼女の病気は悪くなっていく…。

文中で書かれている、被爆した広島についての悲惨な光景と、閑間夫妻の姪に対するいたわりがとても印象に残った。自らも原爆症を抱えながら姪のために奮闘する叔父。その努力むなしく、原爆症を悪化させていく姪。終盤では、彼女の病状はもはや奇跡に頼るしかないほど悪化してしまう。

たった一発の原子爆弾が、ごく普通の、平和な一家の運命をあっさりと変えてしまうことに、衝撃を受けた。戦後65年以上がたった現在となつては、この出来事はともすれば死者何十万人だとか、倒壊家屋何万軒だとか、数字で片付けられてしまいがちだ。実際、この本を読むまでは、自分自身もそんなふう

にこのことを捉えていた。

この本は、戦争というものそんな簡単に数字で

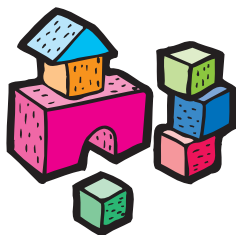
割り切れるものではないこと、何十万という数字の中には、この家族に起こったような出来事が数えきれなほど隠されているということをはっきりと思知らされた。

被爆した街を歩き回る人々が、のどの渇きを癒すために、どす黒い色をした水たまりや、川の水を飲んでしまう。思わず、「危ない」と言ってしまうようになるが、自分たちが飲んでいる水に放射能が含まれていることなど、彼らは知る由もない。「知らない」ということが、どれほど恐ろしいことかというのを思知らされる。

この、放射能の『目に見えない恐ろしさ』は、東日本大震災での福島第一原発事故にも当てはまる。炉心溶融などによって放射性物質が放出され、周辺の住民は避難を余儀なくされている。しかし人類に害しかもたらさない原爆と違って、原発を不要だと言いつつしてしまうのはとても難しい。放射能汚染という危険性を考えれば、ない方がいいに決まっているが、「安易に無くしてしまえ」などと言うことは難しい。私たち自身も、普段原子力の恩恵に授かっているのだから。難しいが、きちんと向き合っていかなければならない問題だと思う。

最後に、一番印象に残ったのは「正義の戦争」などより「不正義の平和」のほうがいいという言葉だった。その言葉は、この本を読み終えた私に、ずっと溶けこんできた。

私は、この言葉について考えた。「正義の戦争などという以前に、そんなものはないのではないか。」と。たとえ正義を守るという名のもとに始めた戦争だとしてもそれは何も生み出さないという作者の主張が、はっきりと伝わってきた。今日、戦後66年余りたっという「戦争を知らない世代」が日本人の殆どを占めるようになった。もちろん、私もその中の一人だ。戦争の酷たらしさや真実をしっかりと知り、それをこれからの世代に伝えていくことが私たちの責務だと感じた。



この物語は、主人公の大学生「橋本太一」が病によってなくなった恋人「峰岸美丘」との思い出を読者に語る形で物語が進行していく。二人が最初に出会ったのは、主人公たちが大学2年生の11月のことである。このとき、太一はサボリ仲間である北村洋次と、笠木邦彦とともに講義をサボって校舎の屋上で日向ぼっこをしていた。そんな主人公たちの視界の隅で一人の女学生が屋上のフェンスを登り始める。太一たちはそれに気がつき自殺はやめるよう説得する。ところが、その女学生はフェンスを登りきって太一たちの方を振り返り哀れむように笑ったのだ。その笑顔が太一の心に火をつけた。太一はフェンスを登り、その女学生の前に降り立った。そこで二人は自己紹介をし、運命が動き出すのだった。

この物語のヒロインである美丘は幼いときに事故にあう。そのときに頭蓋骨と脳の間にある硬膜が裂けてしまい、移植手術を行う。だが、移植に使われていた硬膜はライオデユラであった。ライオデユラによって発病する不治の病、クロイツフェルト＝ヤコブ病は脳障害を引き起こして患者は長くとも1、2年で死んでしまう。ヤコブ病の症状は恐ろしく、発症してから時間がたつにつれて脳障害により、さまざまな記憶を失ってしまう。そして、最終的には動くことを忘れ、しゃべることを忘れ、呼吸をすることさえも忘れてしまつて患者は息を引き取る。美丘はこの病気をいつ発症してもおかしくない状況にありながらも、強く、気高く生きていく。

自分の人生が残り数年あるのか、ないのかわからない状況で人は何をして生きていくのか。物語の中で美丘は言う。「わたし一人だけが気づいているんだ。生きてることは奇跡で、永遠に続くものじゃない。ここにいるみんなだって、命には終わりがある。でも、心と身体の底から、命のすばらしさや限界を感じているのは、わたしだけ。ねえ、太一くん、この世界ってきれいだね。」と。確かに、私たちが普段ただ生活しているときに命のすばらしさや限界を

感じることもなくてないだろう。生きていることは当たり前だと私たちの多くは思っているだろう。奇跡と思うこともなくてめったにない。この世界がきれいだなんて誰が思うだろう。この作品に触れて、やっと私はその事実に気がついたのだ。また、このようなことも美丘は言っている。「時間は永遠にはない。わたしたちはみんな火のついた導火線のように生きている。こんな普通の1日だって、全部借り物だよ。借りた時間は誰かがいつかまとめて取り立てにやってくるんだ。」と、きっとそれが死というものなのだろう。この作品を読み終わってから、自分がどれだけ時間を借りることができるのか、と考えた。私はいつ取り立てがやってきても大丈夫だろうか。くいを残すことなく死ぬのだろうか。美丘は自分の残りの時間を受け入れて、激しく自分の命の灯を燃やし尽くした。私はこれからの自分の人生の中でどれだけ彼女のように輝けるのだろうか。

美丘から大きな影響を受けた太一は、本当の愛の姿を見つけ出す。本当の愛、本当の恋とは、逃げ腰ではなく、恋愛の生むあらゆるプラスとマイナスを、自分の身体で受け止めていくことなのだ。だからこそ恋愛は難しく、苦しくて、切なくて、楽しいのだ。私は恋愛をしたことはおそくない。それっぽいことは何度かあったものの、本当に心から一人の女性を愛したことなどない。だからそれはまだ恋愛じゃないんだろう。これから私は大人になる。きっとそこで恋愛をするのだろうけど、それが本当に本物の恋愛であることを願う。気が狂うような情熱を、想うだけで息が詰まるような恋愛をしてみたいものだ。

美丘とすごした日々を振り返って、太一はこういっている。「ただ普通に暮らしていただけなのに、振り返るとまっすぐに見つめられないほどまぶしい日々がある。」と。私は中学時代を思い返すと、そのような気持ちになれる。しかし、2年生になった今1年生のころを思い出してもそのような気持ちになることがない。私の高専生活1年目は不運の塊だったとしか思えないような日々であったのだ。それがあまりにもつらく、よく学校からの帰り道で泣いていた。進級も怪しかった私だが、なんとか進級はすることができた。だから私は今年こそは楽しい高専生活を送りたいと思っている。私が卒業するときには1年のころの悪夢を笑い飛ばせるような、そ

んな思い出をこれからの高専生活でたくさん作って生きたいと思う。今回読んだ「美丘」はよりよい人生を送るためのヒントを私にたくさん教えてくれた。そのヒントから日常を少しずつ良い方向へ持っていくと思う。また、美丘のように自分をのびのびと表現し、輝いた存在に私はなりたいと思う。



本書を読み、内容の解釈としては漱石の分身ともいえるある教師が生きる舞台を、飼われている猫の観点から見た作品だと察した。冒頭から早速疑問が浮かんだ。「である」と断言した点について、珍しいと感じた。更に対象が「猫」であるからますます疑問が湧く。この問題を、作者が実際に生きていた時代で考えてみると幾分か答えが出る。時は明治時代、文明開化により一気に産業が発達する。無論そのソースは西洋文化を取り入れたことであるの言うまでもない。そして当時の日本は富国強兵を推進しており、まさに軍事一点張りだったとも言える程の勢いで、目的は列強諸国との対立。そう、文明開化も内の一つだった訳だ。だがそれでも思うようにいかない。大きな違いが一つ、「主体の確立」が足りなかった。一人一人が確固たる意志を持つこと、それが屈強な国家の構築に必要な不可欠である。現代でも「日本人ははっきりした意思を表さない」というのは変わらない。Sのような、みたいな、と実に曖昧だ。つまりこの思想が近代からあったことが分かる。「である」は近代化にも関わらず曖昧な日本人の考えを確立させようとする作者の意図であることが言えると共に、現代社会にも通ずるものがあると読んだ。

しかし次の一文では、全く逆の考えを推測させるような表現を使っている。名前など幾らでも付けられるのに、「名前はまだない」である。まさに先程述べた曖昧な考えを思わせる一文だが、個人の確立を述べるのとは裏腹に、作者の強い迷い、苦悩が表されている。イギリス留学を経験していた作者に

とって、欧米諸国と横に並ぶことが、果たして良い結果となるのか不安を感じていたと思われるからだ。このような状況を猫という第三者から見た意見として間接的に読者に伝えようとしていたことが分かる。また三文目は単に例の猫になりきっただけでなく、あくまで一個人だと考え、社会における人の非力さを模したものと考えられるだろう。冒頭の二、三文にこそ作者の意図が隠されていることがあるのだ。

本文ともいえる大事な中身を見てみる。ここには吾輩である猫の周りで起こる、様々な出来事が連ねられている。何かと身の回りで問題（人間の）が多く感じるが、「吾輩」は割と関心がないようだ。人間間の言葉のやり取りに愛想を尽かしたからこそ、猫の視点で意見していると見受けられる。自分としては当時の文明開化での技術の発達、つまり現代の高度な情報化社会に対する批評を伝えようとしていたと受け取った。

作品中には様々な人物が作者の手によって生き生きと描かれている。第一には、「吾輩」に近い人々、言い換えれば「吾輩」を飼っている主人の周りの人達である。どの場面においてもユーモラスな点が含まれていて、その度に猫の視点から冷静、冷酷な性格で評価、結末を述べる。正直このような型には驚いた。第三者とも異なる、全く違う立場を読者にも経験させる。第二には、「吾輩」と直接会話をする人物である。もちろん猫だ。話中で車屋を主人に持つ「黒」との対話があったが、口に出さずに内面の心情を語る場面が多く見られた。また主人の側近として下女がいたが、会話では何故か下女は敬語を使っていたのを不思議に感じた。これら全ては、人間同士の関係に相当すると考える。前者で言いたいことは、異なる見方、即ち立場の逆転、または移動の大切さだと考えた。自らが変わらなければ、何一つ変わらない。近代化、列強化への道を歩み始めていた日本に対し、賛否を問うような形で風刺の意を込めている。後者の、特に前半は曖昧さを表現している部分もあるが、因果さをも表しているのではないかと思う。人間は自分勝手だ。何でも損得で決めつけて、要らぬものは排除する。その結果、現代では効率のみを追い求めていく社会になってしまった。作者は価値観の変化をいち早く読み取り、いずれこうなるとも予想したのかもしれない。また人ではない観点から見ていることから、自分も例外なくその

ような部類に入ると述べている。

作品の末尾は、猫は酔って溺死してしまう。その直前には、主人に暴言を吐いているのが分かる。恐らく本作を著したとき、当時の文明に対する答えを、「自分自身に対して」出すことができなかったのではないだろうか。煮え切らない思いが、漱石を苦しめた、挫折しそうになり、愚痴をこぼしたこともあっただろう。しかし最後は楽に死ぬことを望む。時代の輪を越えて、漱石が解けなかった問の答えを、我々が出さなければならない。



私達は毎日のように報道番組などで「殺人事件」という残酷な言葉を耳にする。私はそれを聞いたそのとき、被害にあった人のことを「かわいそうだ」と同情する。しかし番組のキャスターの「では、次のニュースです」という言葉を聴くと、私の中の同情は次第に薄れていき、しばらくすると忘れ去ってしまう。「かわいそうだ」という私の感情はあくまで一過性のものであるのだ。学校に通って友人と話して、家に帰って…。そんな風に毎日を過ごしている私には「殺人」なんてとても想像し難い。どちらかという殺人事件は現実からかけ離れた私達とは遠い「何処か」で起こっているものという印象があるからだ。

この話を読んで、たった一言のキャスターの言葉で同情を忘れてしまうことのできる自分が幸せだと感じた。同時に私達は、決して起こることのないと思っているような不幸な出来事も、実はいつも背中合わせに過ごしていてそれが起こらず毎日普通に生活できていることはとても貴いことだと考えた。

小学校4年生のカンタと、そのカンタの憧れであり一番の親友のヨウジは下校中の正門で通り魔事件に巻き込まれてしまう。そこでヨウジが命を落としてしまった。カンタは、自分をかばってヨウジが命を落としてしまったと思い自分を責め、自分もヨウジと同じ所に行くんだと自殺を図ろうとする。一番

の親友を失ってしまったカンタの悲しみは、はかり知れない程、深いものだったと思う。きっとこのとき、カンタは悲しみという暗闇の中から抜け出せず彷徨っていたに違いない。私は読み進めていくうちに、無意識に心の中で「頑張り」とそんなカンタを応援していた。カンタが自分の命を絶とうとしたそのとき、命を落としてしまったはずのヨウジに出会った。そこでカンタはヨウジと「最後の力の一滴が枯れるまで生きよう」と約束をする。カンタがヨウジの目となることでヨウジがカンタの一部となり、カンタ自身と、ヨウジのために生きるのだ、と。深い暗闇を彷徨っていたカンタにとってその約束はまさに一筋の希望の光となったのだ。ヨウジとの約束を胸に事件のショックから立ち直り、前を向き日常生活へ戻っていかうとするカンタは小学校4年生の少年とは思えない程強かった。カンタは、事件のあった学校の正門も、恐ろしいことの起こった場所ではなく、懐かしい友人ともう一度再会出来た場所として、またその日から休んでいた学校にも通うことを決めた。私がカンタと同じような境遇だったら、もう一度親友と出会えてもカンタのように立ち直ることは出来ないかもしれないと思う。事件現場にも怖くて近寄りたくないと感じると思う。だから、前に進もうと努力する小学校4年生の少年をとっても強いと感じた。

カンタとヨウジの友情は素晴らしかった。これから生きて、前に進もうと決めたカンタはヨウジのことを忘れることは決してないだろう。亡くなってしまったヨウジはカンタの中で生涯生き続ける。二人は良き友人だったのだ。それはこれからも変わることがないのではないか。カンタとヨウジはお互いがお互いをとても大切に思っていた。唯一無二の存在だった。私も、この二人のように生涯大切にしていけるような友情を築いていきたい。

この話は、私達の日常にも当てはめられるのではないか。私達は、生きていくうちに何度も辛いことや困難なことにぶつかっていくと思う。それがカンタのように大切な人を失ってしまったとまでいかににしても、親友と大喧嘩をしてしまったとか、仕事で取り返しもつかないようなミスを犯してしまったとか、そのようなことは少なからず一度や二度経験すると思う。そのとき苦しむ姿はカンタと重ねることが出来るのではないか。私は、カンタの

ように現実を受けとめ前を向いて困難や苦しみに立ち向かえる人になりたい。

また、死について考えさせられた。普段死について考えることはあまりないけれど、へこんでいるときや悩んでいるときふと、「私はどうして、今ここで生きているのだろう」と考えることがある。そんなときに、病気や不慮の事故で生きていても生きられなかった人のことや、亡くなった人のことを思うと、「私は生きているだけで幸せなのかもしれない」と思うことができる。毎日三食食事をして、学校に通い、友人に囲まれ、泣き、笑い、そうして過ごしていられることが普通になっている私は、いつの間にかそれだけで満足できなくなってしまう。「もっと、もっと」と次々に新しいことを求め、些細なことでも辛いことがあれば「恵まれていない」と思いこみ今以上の幸せを求める。そんな貪欲な自分はとても醜いと感じた。この話を読んで「生きている」ということはそれだけでとても幸せだと思った。辛いこともあるけれど、今の私は幸せなのだ。



タイトルにもあるようにこの本は超訳、つまりドイツの哲学者フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェの哲学を訳し、それを作者なりの解釈で書き綴った、いわゆる自己啓発本である。

「少しの悔いもない生き方を」「今のこの人生を、もう一度そっくりそのまま繰り返してもかまわないという生き方をしてみよ。」読んだ瞬間、それは私が歩んできた16年間の人生に強く響き渡り、私に人生を振り返らせた。そっくりそのままということを考えたとき、人生の半分にも満たない16年間という年月を振り返っただけでも、私には無理という言葉しか浮かばなかった。どんな生き方をすれば良いのかさえ分からなかった。そこで、ニーチェの哲学を知ること、ニーチェや作者の言う生き方が出来るはずだと考え、この本を読み進めていくことにした。

「喜び方がまだ足りない」喜ぶと良い気持ちにな

れる。しかも、それは自分だけでなく周囲の人々をも幸せな気分にする。だから小さいことでも喜ぶことは悪いことではない。しかし、それは心の底からの本物の喜びではない。確かに喜ぶことは自分や周囲の人々に良い影響をもたらすかもしれないが、本当に嬉しかった時の喜びにこそ意味があると思う。そして、喜びの大切なことは何を喜んでいるかだ。喜びには種類があって、それには大きな違いがある。自分や他人の幸せを喜んでいるのか、他人の不幸を喜んでいるのかでは全く違う。後者の喜びは最低の行為だ。自分にとっても、相手にとっても良いことなど一つもない。この本にもあるように、喜びとは誰もが喜べる喜びでなければならない。喜びという最高の行為が、他人に苦痛を与えるという最低の行為になってはならないはずだ。

今までの自分の喜びを見つめてみたとき、まず小さなことでは喜べていない。まず、喜んだこと自体少ないような気がする。そして他人の不幸を喜んだことはある。自分なんてその程度の人間だと思う。本当にすべき喜びをしないで、それとは全く別の喜びをしてしまう。

それを解決する方法もこの本にあった。自分を尊敬すること、自分の主人となることだ。私は自分のことを尊敬出来ていなかった。それでは自分のことを喜べるはずもないし、ましてや他人のことを喜べるはずもないのだ。そして自分の主人となるには、自分のことを尊敬していなくては自分という主人に従わせることはできない。私はこの二つの言葉は深く関係していると思う。自分の中に自分になりたいと思い、尊敬できる主人を作る。そうすることで、今までとは違う自分になれるのだ。

私は高専に入学し、地元を離れて寮で生活をしている。ここではこの本に書かれている様々なことを感じ取ることが出来、強い共感を持った。まず「離れて初めて把握できる」ということだ。何もかもが新しい環境で生活することで、得られるものは多かった。遠くから今までの生活を振り返ったとき、初めてすごいと思えることや、まだまだ甘いと思えることがあり、遠くから振り返ることの大切さを実感した。

それに、自分の常識が通じないことも多かった。全然違う環境で過ごしてきたのだから当然、価値観が違った。自分のそれは自分が学んできたことや、

体験してきたことだけで判断していることである。自分にとっての大は、他人にとっての小かもしれないのだ。「人間であることの宿命」「勝手に行為の大小を決めつけない」とはこういうことだと思う。

熊本の中だけでもこれだけの違いがあるのだから、日本全体、世界全体で考えたときとても不安になった。しかし、そうやって新しい世界を知り、刺激を受けることで新しい人間になれると思う。井の中の蛙、大海を知らずという諺があるように、これは成長する上で大切なことなのだ。

他にも「自分の弱さと欠点を知っておく」「人生を行くときの手すり」「自分しか証人のいない試験」など印象強く心に残っているフレーズが多々ある。この本から得たものは多く、自分に無かった新しい知識や考えを与えてくれた。しかし、それを知ったからと言って理解出来た訳ではないし、それが正しいとも限らない。ただ知ることによって新しい視点からものを見ることが出来るし、価値観も変わってくる。私はまた新しい世界を知ったのだ。

少しの悔いもない生き方をするのは難しいことだが、この本からはそのためのヒントを得ることが出来た。しかし、これはニーチェや作者の考える悔いのない生き方であって、自分にとっての悔いのない生き方とは少し違うものかもしれない。「いつかは死ぬのだから」「時間は限られているのだから、チャンスはいつも今だ。」本文の言葉である。いつか、いつかではなく今を大切にしていかなければならないのだ。今を精一杯生きて、死ぬときには、人生をもう一度そっくりそのまま繰り返したいとほっきり言えるようになりたい。



私は中学生の頃、よく「生と死」について考えた。人間はどこから来たのか、どこへ向かうのか、生きるとはどういうことか、死ぬとはどういうことか。こういったとりとめのないことを考えていたのは、ひとえに私が思春期だったからかもしれない。そし

て、最もよく考えたのが、「死後の世界」についてである。それはあるのかないのか、もしあるのならどういう所か。その時は結局、死んだ人間にしかわからないので考えても結論は出ない、という思いに落ち着かざるをえなかった。しかし、この本と出会い、その頃の曖昧だった思いが、はっきりとした考えに変わったように感じる。

末期ガンで余命5か月と宣告された良平。死を宣告された時、人はどう感じるのか。とても想像できないが、おそらく、世界がそれまでとは違うものになってしまうのではないだろうか、と思う。その視点から見ると、私達が普段何気なく過ごしているこの時間は光輝いて見えるのではないだろうか。

宣告を受けた良平に対し、息子の順一郎は、死後の世界について説き始める。妻もそれを見守る。三人ともそれぞれに辛さを抱えているはずなのに、お互いがお互いのことを思って行動し、前向きにこれから先のことを考えているように見えた。私はここに、支え合い共に生きる家族の絆を、確かな形として見たような気がする。私も、普段は意識しないが形はなくても家族で支え合って生活しているのだと思った。

「まず、父さんは死後の世界を信じる？」という言葉で始まった順一郎の話（彼いわく講義）を追っていくのに、気がついたことが3つある。

1つ目は、「死」や「死後の世界」を、前向きなイメージでとらえていることである。普通「死」というものは、恐れ、避けられる対象という負の概念、暗いイメージがあるが、順一郎の話ではそういった印象はほとんど受けなかった。もちろん、(心情的に) 彼が父を不安にさせないためにそういった表現を避けたのかもしれない。しかし、私自身、なぜそのような印象を受けたのかを話の内容から考えると、死後の世界(天国)はすばらしい所である、というイメージが、臨死体験(ニア・デス体験)の実例を読むなどして、さらに強まったことが挙げられる。

私は、臨死体験という言葉だけは聞いたことがあったのだが、はっきりとした意味は知らなかった。だからそれが、死に瀕してあの世とこの世との境をさまよう体験と知り、驚いた。しかも、実際に一度臨終を告げられた人間が再び意識を取り戻すという例が世界中にあると知り、さらに驚いた。

作中で紹介されている臨死体験者は、死後の世界

を良いイメージをもって話していた。読んでいく内に、この世界での死は、終わりではなく、むしろ次の世界での生の始まりととらえることもできるのだと知った。

2つ目は、順一郎の話し方についてである。彼の話し方はすごくはっきりしていると感じた。抽象的なテーマにも関わらず、断定的な口調で話し、説明が難しそうなお部分では分かりやすい例え話をしたりと、説得力・伝達力の点で工夫が見られた。(作品の最後に明かされるが、彼もまた臨死体験者だった。)

3つ目は、真剣さである。彼の、なんとかして話の内容をわかってもらいたいという思いが、話の節々でも伝わってきた。父の気持ちを少しでも楽にしたいという一心だからかもしれないが、その姿勢に感心すると共に、その裏ではぬぐいきれない悲しみがあつたのだろうと思う。しかし、そんな彼だからこそ、時間をかけてでも最後まで諦めずに伝えることができたのだと思う。

また、自殺についても作中で触れてあつた。私も、自殺者が年々増加傾向にある昨今の世において、その魂はどこへ向かうのだろうと思っていて、自殺者と他殺者は地獄へ行く、という文章を読み、もっともだと思った。やはり、いかなる場合でも「(自分のものも含めて) 命を奪う」ということはあつてはならないと改めて思った。

この作品を読んで、初めて知ったことや、なるほどと思ったことは多くあつた。しかし、「死後の世界」というテーマには様々な考え方がある。作中の考え方もその中の一つであるということをもふまえて、それらを参考にしながら、自分なりの考えを持って生きていきたいと思った。



第57回 青少年読書感想文全国コンクール 熊本県審査入賞者!

第57回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査において、校内読書感想文コンクールで入選した2名を応募し1名が入賞を果たしました。

記

佳作…2年1組 田中 悠貴 「黒い雨」を読んで

第31回 全国高校生読書体験記コンクール 入賞者!

第31回全国高校生読書体験記コンクールにおいて、校内読書感想文コンクールで入選した5名を応募し2名が入賞を果たしました。

記

入選…2年4組 倉永 康博 超訳 ニーチェの言葉
入選…1年2組 樋口 佳奈 「きよしこ」



平成 24 年 2 月 23 日 於：校長室

図書館利用案内

◆開館時間・休館日

平日	4月～9月 10月～3月 春季・夏季・冬季の休業期間中の平日	8：30～20：00 8：30～19：00 8：30～17：00
土曜日	4月～3月 春季・夏季・冬季の休業期間中の土曜日	10：00～16：00 休館
休館日	日曜日、祝日、12月28日～1月4日	

◆貸出について

貸出しの種類	借受者	貸出期間	貸出冊数
一般貸出	教職員	1カ月間	5冊以内
	学生	1週間	3冊以内
	一般利用者	1週間	3冊以内
長期貸出	学生 卒業及び特別研究生	春季、夏季、冬季休業期間中 2ヶ月	5冊以内 5冊以内

- 図書を借りるときは、借りたい図書に学生証を添えてカウンターに係員に申し出て下さい。
- 図書を返却するときはカウンターに係員に返却して下さい。

◆注意事項

- 図書、雑誌等は無断で持ち出さないこと。
- 館内では静かにすること。
- 館内では飲食はしないこと。

お知らせ

◆校内読書感想文・作文コンクール

図書館では例年、読書感想文・作文コンクールを実施しております。このコンクールには奨学後援会の協力を得て、図書券を副賞としています。

最優秀作	1点	図書券1万円分
優秀作	3点程度	図書券6千円分
佳作	10点程度	図書券4千円分

作品の募集は、7月から8月にかけて行っておりますので、多くの応募をお待ちしております。詳細については図書館に掲示します。

なお、新1・2年生につきましては、国語科からの春休みの宿題として読書感想文も対象となりますので、力作をお願いします。

◆卒業・修了予定の学生へ

- 貸出中の図書は早めに返却して下さい。
- 未返却の学生は、卒業・修了判定会議にその旨報告します。

図書館利用状況報告

1. 入館者数（平成23年4月～平成24年1月）

入館者数	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
	通常時間内	3,179	3,086	5,684	5,097	3,110	1,249	1,577	1,980	1,329	1,925	28,216
	夜間開館	989	1,068	1,586	1,688	278	76	304	476	224	582	7,271
	土曜開館	72	79	102	182	0	0	24	63	10	86	618
	合計	4,240	4,233	7,372	6,967	3,388	1,325	1,905	2,519	1,563	2,593	36,105

(P・S)

- 1) 夏季休業期間 平成23年8月15日(月)～9月22日(木)
- 2) ICT活用学習支援センター棟改修工事に伴う図書館の利用関係
 - ① 仮図書館…「くぬぎ会館2階第1研修室」
 - ② 8月11日(木)～8月24日(水)の期間は移動作業のため休館

蔵書数及び雑誌等の種類

1. 蔵書数（平成24年1月31日現在）

区分	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	計	
図書 の 冊 数	和書	6,347	2,915	5,294	6,221	10,367	18,561	1,094	2,937	3,094	12,885	69,715
	洋書	551	18	49	28	722	1,680	16	21	1,085	986	5,156
	計	6,898	2,933	5,343	6,249	11,089	20,241	1,110	2,958	4,179	13,871	74,871
雑誌 の 冊 数	和雑誌	15	0	2	8	7	25	2	10	4	2	75
	洋雑誌	2	0	0	0	1	10	0	2	0	0	15
	計	17	0	2	8	8	35	2	12	4	2	90

2. 視聴覚資料

種類	DVD	ビデオテープ	CD	LD(レーザーディスク)
数量	222巻	790巻	620枚	190枚

「図書館だより」編集担当委員

図書館長

三好正純

図書館運営委員

大石信弘

編集後記

私事で恐縮ですが、年度初めより猫好きの私が犬を飼い始めました。反抗期に入った次男との共通の話題作りが目的でしたが、四国犬の雑種である仔犬は荒い気性をしていました。そこで飼うに当たり西合志図書館で専門書を漁ることにしました。どの本も著者独特の切り口があり、それぞれに目指すところは違っていたのですが、どの本にも共通して、犬は群れを成す生き物なのでリーダーである飼い主の姿勢が問われるとありました。犬を猫っ可愛がりしたがる私にとって、迎合せず毅然とした態度で犬と接せよ、というのはとっても疲れることでした。一年経った今、私の目から見た愛犬はどことなく猫っぽく映るのですが、周りの目を気にしながら一緒にいる私を、当の愛犬はどう見ているのか一度聞いてみたいものです。

さて、このたび熊本キャンパス図書館だより「くぬぎの森」第23号をお届けする運びとなりました。寄稿していただいた方々にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。図書館長の三好先生からは、ブックハンティングで学生自らが選んで購入した本の分類と分析をしていただいています。皆さんの図書館に対する思いをぜひ蔵書に反映させてください。また、人間情報の村上先生からは通詞をキーワードに江戸時代での国際交流をたどる読書探索について寄稿いただきました。先生の広がりを持ちなおかつ深みのある読書法に一度触れてみてはどうでしょうか。そして、恒例の校内読書感想文コンクールの選考結果および入選作を掲載しています。人格形成期に社会の変化を微妙に反映した瑞々しさがうかがえます。さらに、図書館の利用状況などの情報を掲載しています。

図書館棟の改修ももうすぐ終わり、新年度から皆さんに新しい図書館をお披露目できます。活用法は各人各様でしょうが、自分らしさを探求する場として図書館を利用していただきたいと思います。

図書館運営委員 大石 信弘